

高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第11冊

奥の坊遺跡群XI
(奥の坊遺跡Ⅲ区 遺構編)

高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第一冊

奥の坊遺跡群XI
(奥の坊遺跡Ⅲ区 遺構編)

二〇一二年三月

高松市教育委員会

2013年3月

高松市教育委員会

例　　言

1 本報告書は、高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11冊で、高松市高松町に所在する奥の坊遺跡Ⅲ区（おくのぼういせきさんく）の遺構の報告を収録した。

2 発掘調査地ならびに調査・整理期間は次のとおりである。なお、整理期間は、本書の刊行に係る整理期間を記載した。

調査地：高松市高松町奥ノ坊

発掘調査：平成10年10月6日～平成11年2月16日

整理作業：平成24年4月2日～平成24年12月28日

3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会教育局文化財課（平成19年度までは文化部文化振興課）が行った。発掘調査は文化財専門員 大嶋和則が担当し、本書の執筆・編集を大嶋と協議のうえ、文化財専門員 波多野篤が行った。なお、遺構の記載にあたっては、現地調査の所見を尊重して行った。

4 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の方々および関係諸機関から御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。

香川県教育委員会、片岡宏二、川部浩司、地元自治会、地元水利組合、古高松土地改良区

5 現地での発掘調査や整理作業にあたっては、下記の方々の御協力を得た。記して厚く謝意を表する（敬称略）。

大野宏和・川部浩司・信吉純恵・増田ゆづ・山内康郎（当時 徳島文理大学大学院）、四方大輔・高瀬智充・高崎誠・水田貴士・林田真典（当時 徳島文理大学）、末光甲正（当時 讃岐文化遺産研究会）

6 本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。

航空写真測量 アジア航測 株式会社

7 挿図として、国土地理院発行1／25,000地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。

8 本報告の高度値はT.P.を基準とし、座標は国土座標第IV系（日本測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。

9 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査の経過		第5章 調査成果	
第1節 発掘調査の経過	1	第1節 各調査面の概要	13
第2節 整理等作業の経過	1	第2節 第一遺構面の調査成果	13
第2章 地理的・歴史的環境		第3節 第二遺構面の調査成果	14
第1節 地理的環境	3	第6章 総括	
第2節 歴史的環境	3	第1節 III区の調査成果	55
第3章 奥の坊遺跡群の概要		第2節 奥の坊遺跡の集落の範囲	55
第1節 調査地周辺の地形	6	第3節 今後の検討課題	56
第2節 既往の調査成果の概要	6		
第4章 調査の概要			
第1節 調査地の概要	11		
第2節 調査区の概要と調査方法	11		
第3節 基本層序	11		

挿図目次

図1 奥の坊遺跡の位置とおもな河川	1	図20 第二遺構面 検出遺構 実測図10 (1/40)	32
図2 高松市東部運動公園整備事業発掘調査地 (1/3,000)	2	図21 第二遺構面 検出遺構 実測図11 (1/40)	34
図3 周辺道路分布図 (1/40,000)	4	図22 第二遺構面 検出遺構 実測図12 (1/40)	35
図4 事業地周辺の既往の調査成果 (1/1,500)	7・8	図23 第二遺構面 検出遺構 実測図13 (1/40)	36
図5 グリッド配置図 (1/800)	11	図24 第二遺構面 検出遺構 実測図14 (1/40)	37
図6 調査区南壁 上層断面図 (1/80)	12	図25 第二遺構面 検出遺構 実測図15 (1/40)	38
図7 第一遺構面 平面図 (1/200)	15・16	図26 第二遺構面 検出遺構 実測図16 (1/40)	39
図8 第一遺構面 検出遺構 実測図1 (1/40)	17	図27 第二遺構面 検出遺構 実測図17 (1/40)	40
図9 第一遺構面 検出遺構 実測図2 (1/40)	18	図28 第二遺構面 検出遺構 実測図18 (1/40)	42
図10 第二遺構面 平面図 (1/200)	19・20	図29 第二遺構面 検出遺構 実測図19 (1/40)	43
図11 第二遺構面 検出遺構 実測図1 (1/80)	21	図30 第二遺構面 検出遺構 実測図20 (1/40)	44
図12 第二遺構面 検出遺構 実測図2 (1/80)	23	図31 第二遺構面 検出遺構 実測図21 (1/40)	45
図13 第二遺構面 検出遺構 実測図3 (1/80)	24	図32 第二遺構面 検出遺構 実測図22 (1/40)	46
図14 第二遺構面 検出遺構 実測図4 (1/40)	25	図33 第二遺構面 検出遺構 実測図23 (1/40)	47
図15 第二遺構面 検出遺構 実測図5 (1/80)	26	図34 第二遺構面 検出遺構 実測図24 (1/40)	48
図16 第二遺構面 検出遺構 実測図6 (1/80)	28	図35 第二遺構面 検出遺構 実測図25 (1/40)	49
図17 第二遺構面 検出遺構 実測図7 (1/40)	29	図36 第二遺構面 検出遺構 実測図26 (1/40)	51
図18 第二遺構面 検出遺構 実測図8 (1/40)	30	図37 第二遺構面 検出遺構 実測図27 (1/40)	52
図19 第二遺構面 検出遺構 実測図9 (1/40)	31	図38 第二遺構面 検出遺構 実測図28 (1/40)	53

表目次

表1 東部運動公園整備事業に伴う発掘調査経過	2	表2 調査地周辺の遺跡	3
------------------------	---	-------------	---

本文写真目次

写真1 SK31003 断面 (南から)	18	写真3 SD31017 土管出土状況 (西から)	18
写真2 SK31003 全景 (南から)	18	写真4 SD31017 土管出土状況 (南から)	18

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査の経過

事業全体の経緯と経過および発掘調査の経緯の詳細については、昨年度までに刊行している同一事業の報告書である『奥の坊遺跡群I～X』で述べているため、本書では省略する。なお、東部運動公園整備事業に伴い実施した発掘調査の調査区配置図を図2に、調査を実施した期間や各地区的報告書刊行年度などを表1にまとめたので、そちらも参照されたい。

本書は、平成10年度に実施したⅢ区の発掘調査のうち、検出した遺構について報告するものである。Ⅲ区は、平成22年度刊行の『奥の坊遺跡群IX』で報告したVI区の南側隣接地にある（図2）。平成10年度には、隣接するI～Ⅲ区の発掘調査を同時に行つたが、I・II区の調査成果については、平成18年度に刊行した『奥の坊遺跡群V』に掲載しているため、そちらを参照願いたい。I～Ⅲ区の発掘調査開始日は平成10年9月14日で、Ⅲ区の調査着手日が同年10月6日、完了日が平成11年2月16日、I～Ⅲ区すべての調査が完了したのは平成11年2月19日である。なお、Ⅲ区の調査面積は約2,170m²である。以下に、Ⅲ区に限定した調査の経過を述べる。

調査日誌抄（平成10年10月6日～平成11年2月16日）

平成10年10月6日（火）～同年10月23日（金）第一道構面までの重複掘削。

平成10年10月22日（木）～同年10月29日（金）第一道構面の道構検出作業。

平成10年10月30日（金）～同年11月11日（水）第一道構面の道構掘削作業。

平成10年11月11日（水）第一道構面完掘状況の写真撮影。

平成10年11月12日（木）～同年12月9日（水）Ⅲ層の人力掘削。

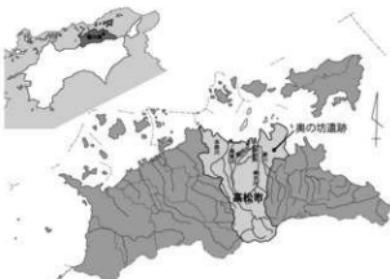


図1 奥の坊遺跡の位置とおもな河川

平成10年12月2日（水）～平成11年12月7日（月）第二道構面の道構検出。

平成10年12月10日（木）～平成11年2月9日（火）第二道構面の道構掘削。

平成11年2月10日（水）航空写真測量および足場写真的撮影。

平成11年2月12日（金）～同年2月16日（火）補足調査。

平成11年2月16日（火）Ⅲ区の調査が完了。

第2節 整理等作業の経過

本書で報告するⅢ区の整理作業は、平成13年度に遺構・遺物・図面の基礎整理、平成24年4～11月に挿図のレイアウトとトレース、平成24年6～12月に原稿の鉛筆・編集を行つた。なお、後述するが、Ⅲ区から出土した遺物については平成25年度刊行の報告書に掲載する予定であるが、その整理作業も同時にしている。遺物の整理は、平成21年1月～平成22年3月に実測を行い、平成24年4月から実測図のチェック・修正を行つてゐる。

さて、Ⅲ区の発掘調査では、多数の遺構・遺物が出土した。特に遺物量は、隣接するVI区と比較しても多く、そのため遺構・遺物を同一の報告書に掲載することは様々な面を考慮して困難であると考えられた。そこで、少しでも多くの遺物を報告書に掲載し、公開することを意図して、Ⅲ区に限っては遺構編と遺物編に分けて、前者を平成24年度、後者を平成25年度に刊行することとした。本書はその遺構編である。本年度の報告書の作成にあたつては、次年度に報告する遺物編を念頭に、のちに双方の関係を把握しやすいように考慮した。

これまで、東部運動公園整備事業に係る発掘調査とその報告書作成は、十数年の歳月を費やして行つてきたが、その作業も平成25年度で完了する。この間、昨年度までに合計10冊の報告書を刊行し、本年度からの残り2ヵ年度分を加えると、当該事業で合計12冊の報告書を刊行する予定である。当該事業に伴う報告書の刊行経過は表1に示したが、これまでの発掘調査によって、金川淵古墳・大空古墳・大空北遺跡・奥ノ坊古墳群・奥の坊奥池西遺跡・奥の坊遺跡・奥の坊椎現前遺跡・久米池遺跡の状況が明らかとなった。第3章において、これまでの各遺跡の調査成果を整理したのでそちらを参照されたい。

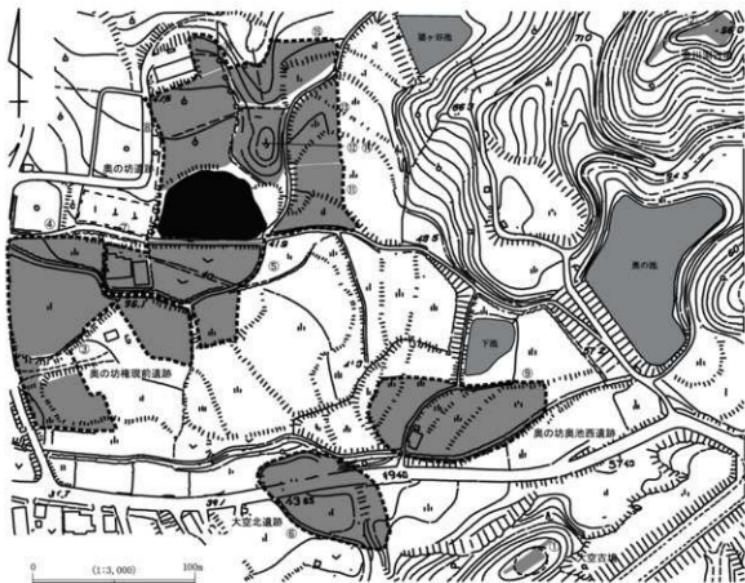


図2 高松市東部運動公園整備事業発掘調査地 (1/3,000)

表1 東部運動公園整備事業に伴う発掘調査経過

番号	遺跡名	調査区分	調査期間	調査面積 (m ²)	調査方法	報告書シリーズ名 (刊行年月)
-	試掘調査	全域	1995.8.4 ~ 1997.10.8	2,997	直営	
①	大空古墳	全域	1996.2.14 ~ 1996.2.23	150	直営	奥の坊遺跡群 I (1999.3)
②	金川洞古墳	全域	1996.2.23 ~ 1996.3.8	300	直営	
③	奥の坊現前遺跡	I ~ III	1997.2.10 ~ 1997.3.24	1,560	委託	奥の坊遺跡群 II (2004.3)
④	奥の坊現前遺跡	IV ~ VI	1997.10.7 ~ 1997.3.13	5,200	委託	
⑤	奥の坊遺跡	I + II III	1998.9.14 ~ 1999.2.19	4,900	委託 本書	奥の坊遺跡群 V (2006.12) 奥の坊遺跡群 V (2006.12)
⑥	大空北遺跡	全域	1999.4.16 ~ 1999.6.4	2,200	直営	奥の坊遺跡群 III (2004.12)
⑦	奥の坊遺跡	V	1999.5.28 ~ 1999.7.13	700	直営	奥の坊遺跡群 VI (2007.12)
⑧	奥の坊遺跡	VI VII	1999.11.10 ~ 2000.3.3	2,300	委託 委託	奥の坊遺跡群 IX (2011.3) 奥の坊遺跡群 X (2012.3) (遺物包含層出土遺物編)
⑨	奥の坊古池西遺跡	全域	2000.4.17 ~ 2000.7.25	3,600	直営	奥の坊遺跡群 III (2004.12)
⑩	奥の坊遺跡	VIII	2000.10.2 ~ 2000.12.28	300	直営	奥の坊遺跡群 VII (2009.3)
⑪	奥の坊遺跡	IX	2000.10.5 ~ 2001.1.12	1,180	委託	奥の坊遺跡群 VII (2009.3)
⑫	奥の坊古墳群 (測量)	全域	2001.6.5 ~ 2001.6.27	-	直営	奥の坊遺跡群 IV (2006.3)
⑬	奥の坊遺跡	X	2001.8.27 ~ 2002.1.18	1,320	委託	奥の坊遺跡群 VII (2009.3)
⑭	奥の坊古墳群	全域	2001.9.4 ~ 2001.11.28	1,020	直営	奥の坊遺跡群 IV (2006.3)
⑮	奥の坊遺跡群	XI	2002.4.2 ~ 2002.7.5	1,180	直営	奥の坊遺跡群 VII (2009.3)
-	久米池遺跡	全域	2003.1.8 ~ 2003.1.21	200	立会	奥の坊遺跡群 IV (2006.3)

番号は、図2の番号に対応する。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都で、平成17年9月および平成18年1月に近隣6町と合併し、人口約42万人、面積約375km²の新たな高松市が誕生した（図1）。市域の大部分を占めるのが高松平野と呼ばれる平野部で、讃岐山脈に端を発する中小河川によって形成された沖積地にあたる。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川の6河川が瀬戸内海に向けて流れ込んでいる。とりわけ、現在の春日川以西の沖積地を形成したのが香東川と考えられている。一方、調査地の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）地区は春日川と新川に近い地域で、両河川は水量が少なく、平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は形成していない。また、古高松地区の北部は、江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり、寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、古高松地区の北に位置する屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による）、東を立石山山塊、南を久米山丘陵、西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は、城下町の高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形を推定できる史料として、古老の話を元に香西成資が享保4（1719）年に編纂した『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年の頃として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山西受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干渴ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」との記述がある。ここで言う小山とは、現在の高松市新田町小山にあたると考えられ、この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定される。

東部運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として調査を行った「奥ノ坊」は高松町の北東端にあたり、地形的には旧高松市と旧牟礼町（現、高松市牟礼町）にまたがる標高100～200mの山塊の西側低丘陵地の尾根および谷部に位置する。現在当地は内陸部としての景観をなすが、上記の推定海岸線を考慮すると海岸から1.0～1.5kmと非常に近い場所に位置するものと考えられる。

第2節 歴史的環境

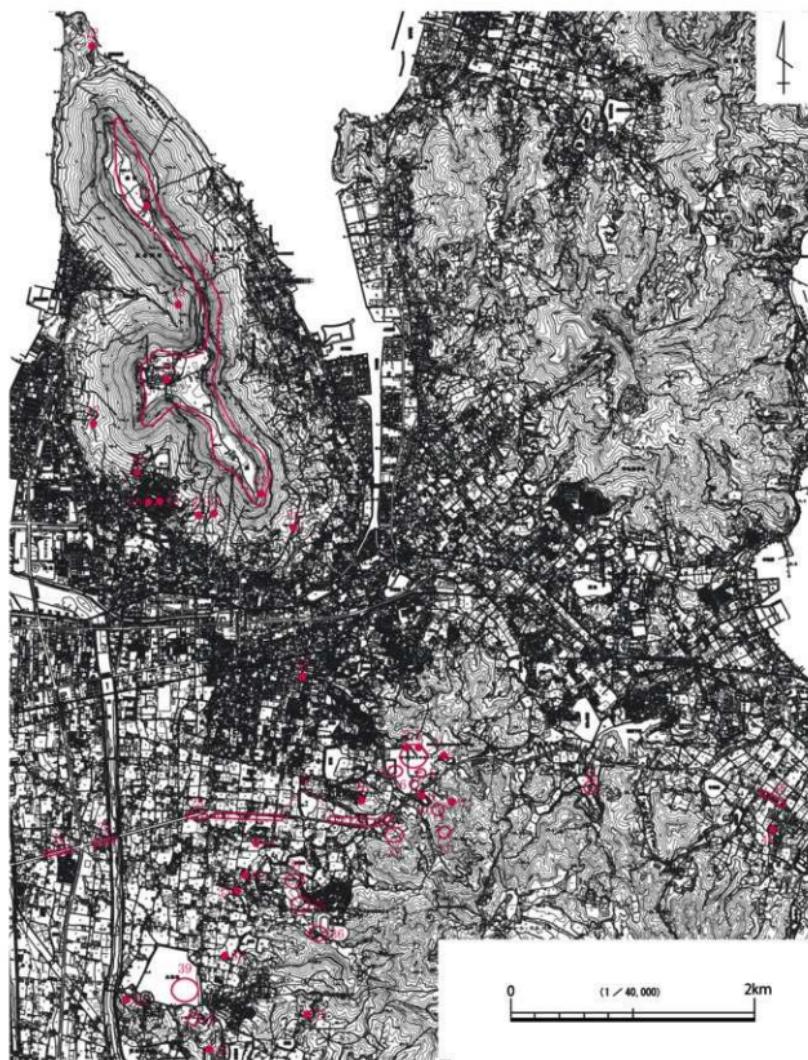
調査地周辺では、おもに発掘調査によって旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている（図3）。各時代のおもな遺跡と概要について表2に整理したが、ここでは奥の坊遺跡の集落が最も盛んした弥生時代に限定して、周辺の遺跡を概観する。

奥の坊遺跡の南西側約100mの地点には、奥の坊現前遺跡〔4〕が位置する。遺跡の中心は後期前半であるが、調査では中期前半の竪穴建物跡もわずかに検出されており、奥の坊遺跡の集落との密接な関連が想定される。また、奥の坊遺跡から南東へ約450mの地点には、香川県の後期前半の標準となる土器が出土した天空遺跡〔10〕が所在する。

表2 調査地周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要	文献
旧石器～縄文				
40 久木池遺跡	新田町	ナイフ石器が出土。	1	
27 小山・南行路遺跡	新田町	鹿とし穴状の火坑を14基検出。	2	
5 鹿の坊古墳西遺跡	高松町	鹿とし穴とされる遺構を検出。	3	
地盤時代				
12 漢造神社遺跡	高松町	施設跡手前の廻廊と考えられる遺構を検出。	4	
41 犀谷遺跡	牟礼町	縫織壁跡が出土。	5	
40 久木池遺跡	新田町	中階段手の施設性集落。輪画土器や鐵斧が出土。	1	
10 大空遺跡	高松町	後開削手の廻廊となる土器が出土。	6	
4 鹿の坊古墳西遺跡	高松町	廻廊土器が出土。	7	
11 大空南遺跡	高松町	門形土器が出土。	8	
27 南行路遺跡	高松町	廻廊土器が出土。	9	
27 小山・南行路遺跡	新田町	廻廊土器が出土。	10	
40 里遺跡	牟礼町	後開削手の廻廊となる土器が出土。	10	
45 鹿の坊遺跡	牟礼町	漆が付着した土器が大量に出土。	11	
古墳時代				
42 漢造神社遺跡	東山町	堅式石室が2基検出。	4	
43 高松市泰日古墳	前田町ほか	全長5mの前方後円形。堅式石室が2基検出。	12	
12 長崎古墳	屋島町	阿蘇原古墳堅式石室の複数が出土。	13	
31 小山古墳	新田町	複数室を有する後期古墳。	9	
番号	遺跡名	所在地	概要	文献
32 久木古墳	新田町	巨大な天井石で石室を構成した古墳。	14	
43 鹿の坊古墳	前田町	丁度型の石室。	15	
38 久木古墳	新田町	石室を有し、奥内側の龜甲形陶棺を設置。	16	
26 良吉古墳群	高松町	墳頂は円墳で、施式式石室。	9	
35 鹿尾古墳群	新田町	前後円墳と円墳からなる古墳群。	9	
24 屋山小古墳群	新田町	円錐形墓からなる古墳群。	9・23	
26 (伊)古墳群	新田町	円錐形墓からなる古墳群。	17	
23 良吉古墳群	高松町	円錐からなる古墳群。	18	
8 大空古墳	高松町	直径15mの円墳。	6	
7 金刀比羅古墳	高松町	直径10mの円墳。	6	
古代～近世				
14 伊佐城	屋島町	城門遺構や石垣を検出。	13	
28 前田本村遺跡	前田町	先行祭祀遺跡を検出。	19	
27 小山・南行路遺跡	新田町	先行祭祀遺跡を検出。	2	
4 鹿の坊古墳前遺道路	高松町	先行祭祀遺跡を検出。	7	
33 山吹塚	新田町	古墳の瓦を採取。	20	
13 仁王堂跡	屋島町	10～11世紀の石建物などを検出。	13	
30 田浦・西遺跡	春日町	10～11世紀の石建物などを検出。	21	
5 鹿の坊古墳西遺跡	高松町	講を検出。	3	
29 田浦・東遺跡	春日町	近世の屋敷跡を検出。	22	

※番号は図2の番号に対応する。なお、表2は時代ごとに遺跡を整理したため、複合遺跡の場合には複数回記載する場合がある。



1 奥の坊遺跡	2 奥ノ坊1号墳	3 奥ノ坊2~4号墳	4 奥の坊稚現前遺跡	5 奥の坊奥池西遺跡	6 大空北遺跡
7 金川西古墳	8 大空古墳	9 スベリ山古墳	10 大空遺跡	11 大空南遺跡	12 長崎北古墳
13 千間堂跡	14 屋崎城	15 浦生石屋	16 屋島寺	17 北浜1~3号墳	18 中浜北古墳
19 屋島中央西古墳	20 屋島中央東古墳	21 金刀比羅宮社城古墳	22 東山地古墳	23 屋島経塚	24 濑ノ谷1~3号墳
25 高松（喜岡）城跡	26 長尾1~3号墳	27 小山・南谷遺跡	28 新田本村遺跡	29 川南・東遺跡	30 川南・西遺跡
31 小山谷古墳	32 山下古墳	33 山下魔寺	34 間山小古墳群	35 間山古墳群	36 谷谷古墳群
37 南谷遺跡	38 久木古墳	39 久米池遺跡	40 久米池南遺跡	41 高松市茶臼山古墳	42 麻志神社遺跡
43 避神木社古墳	44 羽間遺跡	45 原中村遺跡	46 原遺跡		

図3 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

次に調査地の西側を概観すると、調査地の南西約3kmの地点には諏訪神社遺跡〔42〕があり、前期後半頃の環濠と考えられる溝が検出されている。諏訪神社遺跡は標高25～28mの丘陵尾根先端部に営まれた遺跡で、溝はその丘陵を囲むように配置されている。溝の内側には同時期の遺構・遺物はほとんど認められず、一般的な環濠集落とは様相を異にする点が注目される。諏訪神社遺跡では中期前半の溝も確認されているが、中期後半には木棺墓3基を造墓し、遺跡の性格が変化している点にも留意すべきである。諏訪神社遺跡から南東へ600mの位置には、中期後半の高地性集落である久米池南遺跡〔40〕がある。久米池南遺跡では、掘立柱建物跡を併んで竪穴建物跡が構築されており、集落の外縁部には土壙墓が造墓されている。さらに、久米池南遺跡から鉄斧や絵画土器が出土した点は注目される。一方、調査地から丘陵を隔て東へ約3kmの地点には、後期から終末期を中心に営まれた原中村遺跡〔45〕が位置し、竪穴建物跡などで構成される集落を形成している。また、奥の坊遺跡から東へ約1.5kmの地点には、明治14・15年頃の開墾中に細形銅劍が出土した羽間遺跡〔44〕が位置する。

以上のように、調査地周辺には奥の坊遺跡、奥の坊現前遺跡、大空遺跡などの集落が中期から後期にかけて営まれ、さらに調査地から3km圏内には前期から後期にかけての遺跡が点的に分布する状況が読み取れる。いずれも長期間継続する集落や墓域は認められず、高松平野に所在する遺跡全体の動向と同様の傾向である。

表2 引用文献

- 1) 高松市教育委員会1988「久米池南遺跡発掘調査報告書」
- 2) 香川県教育委員会1994「県道高松志度線道路改良事業に伴う発掘調査報告 小山・南谷道路 平成5年度」
- 3) 香川県教育委員会1997「県道高松志度線道路改良事業に伴う発掘調査報告 小山・南谷道路Ⅰ」
- 3) 高松市教育委員会2004「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3冊 奥の坊道路群Ⅲ（大空北道路・奥の坊奥池西道路）」
- 4) 高松市教育委員会2007「諏訪神社本殿移築・久米山墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 諏訪神社道路 久米山道路群・諏訪神社御旅所地区K-1」
- 5) 半札町史編集委員会（編）「半札町史」
- 6) 高松市教育委員会1999「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 奥の坊地区（試掘）大空古墳 金川瀬古墳」
- 7) 高松市教育委員会2004「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊 奥の坊道路群Ⅱ（奥の坊現前遺跡）」
- 8) 古高松郷土誌編集委員会（編）1977「古高松郷土誌」
高松市歴史資料館1996「高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～」
- 9) 古高松郷土誌編集委員会（編）1977「古高松郷土誌」
- 10) 六牽忠一1961「香川県木本郡半札村原遺跡の土器」「弥生式土器集成2」
- 11) 香川県教育委員会2000「県道高松志度線緊急整備工事および公立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原中村道路」
- 12) 香川県教育委員会1970「高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報」
前田郷土誌編集協議会1989「前田郷土誌」
- 13) 高松市教育委員会2003「史跡天然記念物 屋島 - 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ -」
高松市教育委員会2008「屢崎城跡Ⅱ - 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ -」
- 14) 香川県教育委員会1980「山下古墳調査報告」
- 15) 香川考古刊行会1993「香川考古 第2号」
- 16) 高松市教育委員会2004「高松市指定史跡 久本古墳 - 保存整備・市道新田町61号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」
- 17) 高松市教育委員会2004「唐谷古墳群」
- 18) 高松市教育委員会2006「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4冊 奥の坊道路群Ⅳ（奥の坊古墳群・久米池道路）」
- 19) 高松市教育委員会2006「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第3冊 新田本村道路」
- 20) 高松市歴史資料館1996「第11回特別展 諸侯の古瓦廻」
- 21) 高松市教育委員会1999「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 川南・西道路」
- 22) 高松市教育委員会2000「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊 川南・東道路」
- 23) 高松市教育委員会2007「岡山小古墳群11号墳」「高松市内道路発掘調査概報 - 平成18年度国庫補助事業 -」

第3章 奥の坊遺跡群の概要

第1節 調査地周辺の地形（図4）

当該事業で調査した各遺跡は丘陵とその周辺部に位置し、各調査区によって高低差および地形的な特徴は異なる。土地利用の時期別の変遷を整理する前に、おおまかに当地の地形的な特徴を概観し、なおかつその特徴を踏まえたうえで、任意で地形のエリア分けを行い土地利用の変遷を述べることとする。

調査地周辺の大きな特徴として、①弥生時代中期～後期にかけて集落が営まれる点、②丘陵上で古墳時代の終末期を中心に造墓活動が活発化する点、以上2点が抽出できる。この点からも、調査地は集落の形成に適した緩傾斜面、古墳の造墓に適した眺望の良い丘陵地、さらにそれらの土地利用からは除外された低地部というおおむね3つの区分が可能と考えられる。とくに調査地周辺の地形を任意のエリアに区分する場合に重要なのが、東側の丘陵地から奥の池・下池と連続して西側へと下る谷部（低地部）である。後述するが、低地部では発掘調査によって弥生時代～中世にかけての旧河道が検出されているし、なおかつその周辺は遺構の分布密度が低い。また、本調査に先行して実施された試掘調査でも、低地部の複数箇所に設定したトレンチで旧河道が検出されている。この点から、谷部がその北側と南側の土地利用を隔てる要因になっていることが予想される。よって、谷部（低地部）でなおかつ遺構の希薄な箇所を境界として、北側をエリアA、南側をエリアBとする。

エリアA エリアAの北側および東側には丘陵があり、その丘陵の入り組んだ部分に北から南へと緩やかに傾斜する地形面が連続する。エリアAの丘陵上には、古墳時代に金川淵古墳、奥ノ坊古墳群などの古墳が造られ、緩やかな傾斜を持つ地形面上には、弥生時代中期から古代にかけて集落が営まれる。とりわけ、奥の坊遺跡は、弥生時代中期前半に帰属する遺構・遺物が濃密に分布する集落遺跡で、その成立はエリアAの緩傾斜面の土地利用におけるひとつの画期と位置づけられる。なお、奥ノ坊古墳群が分布する舌状の丘陵のさらに東側にも婆ヶ谷池から南下する谷部が認められる。ここでは、調査によって弥生時代中期の遺物を含む旧河道を検出しておらず、谷部であるが故に上流部から土砂が流入するなど、奥の坊遺跡の集落が形成される時点では地形的に安定しない場所であったと考えられる。他方、この旧河道が奥の坊遺跡の集落と同時に機能していたとすれば、集落の周辺で水を得ることができるという地理的な利点と見ることもできる。加えて、集落の東側に丘陵が存在することで、集落が流路の増水時における水害から免れることも可能と考えられる。以上の諸要素は、集落の選地と成立には重要な視点と考えられ、当集落が立地する地点の地形的な優位性を推定することができる。

エリアB 南から東にかけて丘陵が存在し、谷部との間に北へと傾斜する地形面が連続する。土地利用はエリアAと大きく異なるものではなく、エリアBでも緩傾斜の地形面上を中心として、谷部との境に集落が営まれる。ただし、エリアAのあり方と異なる点は、奥の坊奥池西遺跡において、縄文時代にさかのぼる遺構・遺物が認められる点、奥の坊遺跡のように濃密に遺構・遺物が認められるような大規模な集落の形成には至らない点、以上2点が挙げられる。この点で、エリアAとは土地利用が開始された時期やその利用の形態が異なる点を推定できる。他方、決定的な相違として、集落が谷部と接するという点である。すなわち、エリアAの奥の坊遺跡の集落のように丘陵など地形的にさえぎるものもなく、増水時に集落を水害から護る地形的な優位性が認められない。この点は、集落の形成に少なからず影響を与えているものと考えられる。

第2節 既往の調査成果の概要

a. エリアAとその周辺の遺跡

エリアAでは弥生時代中期前半、弥生時代後期前半、古墳時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が出土した。

弥生時代中期 弥生時代中期以前のエリアAの状況は判然としない。しかし、奥ノ坊古墳群を検出した調査地で、表土層からナイフ形石器が1点出土している点と、奥の坊遺跡の北側にあたるⅧ区において混入品と考えられる弥生時代前期前半の遺物が数点出土しており、何らかの人的活動があった可能性もある。

エリアAで明確に土地利用の痕跡を確認できるのは、弥生時代中期前半以降ということになる。弥生

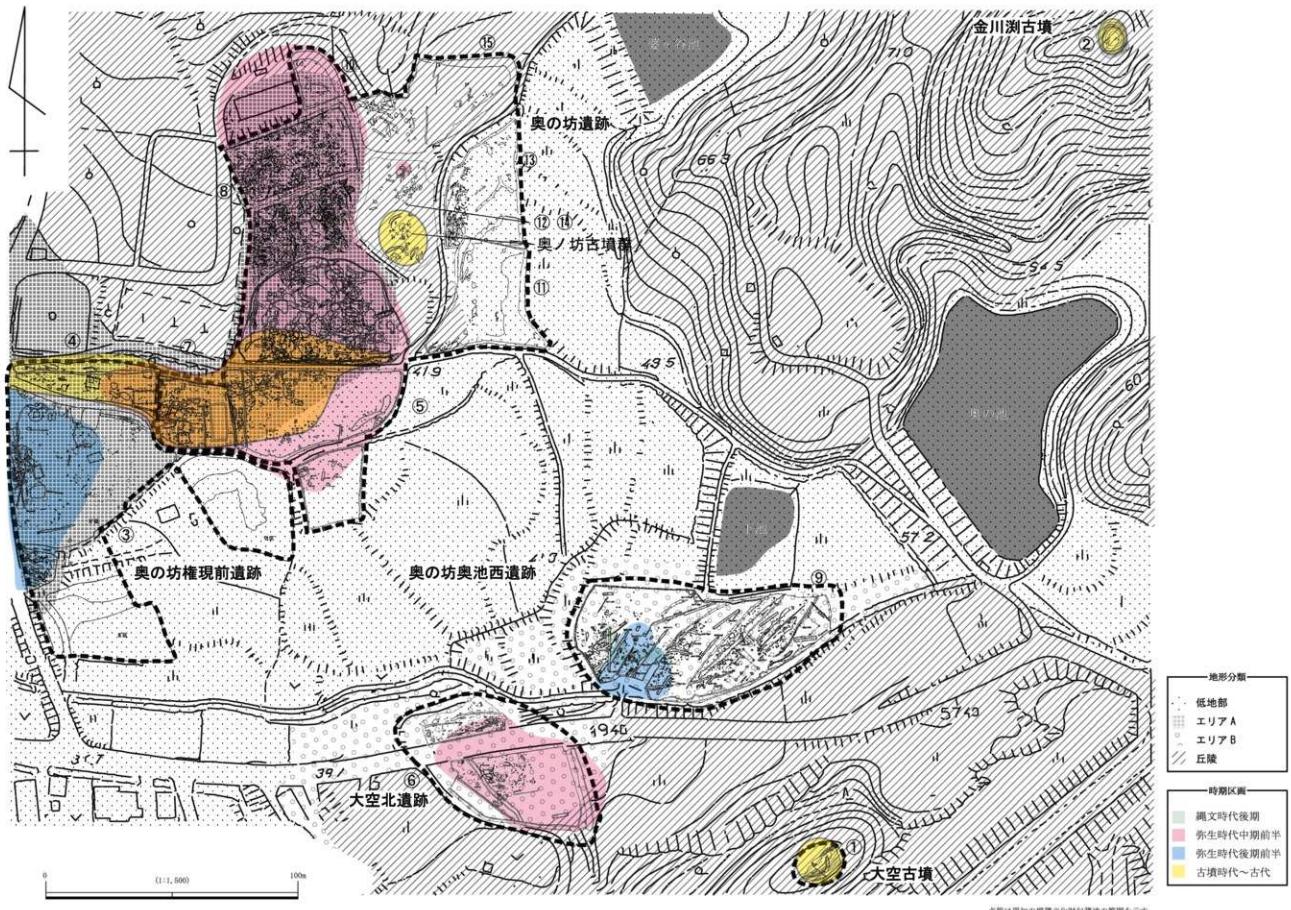


図4 事業地区辺の既往の調査成果 (1/1,500)

時代中期前半には当地の中心的な集落として、奥の坊遺跡と奥の坊権現前遺跡の双方が成立する。奥の坊遺跡は、奥ノ坊古墳群が立地する舌状に延びる丘陵の西側の緩傾斜面上に居住区の中心が位置しており、発掘調査では多数の竪穴建物跡などの居住遺構を確認している。調査成果のうち特筆すべき点として、松葉里型住居（SH61001-a）を1棟検出した点、擬朝鮮系無文土器が出土した点、分銅形土製品の祖形の可能性がある顔状土製品が複数出土した点、竪穴建物内などを中心に多量の石器が出土した点、鉄器が出土した点、以上を挙げることができる。なお、奥の坊遺跡の南西端では、方形周溝墓の可能性がある遺構（ST52001）を1基検出している。当地点は、遺構の分布状況より当集落の南西側縁辺部に位置するものと考えられ、その地点では一部墓域としても利用された可能性がある。また、奥ノ坊古墳群と隣接する位置でも、弥生時代の土壙墓の可能性がある遺構を検出している。これが当集落と同時期のものであれば、集落の東側の丘陵上にも墓域が存在した可能性がある。

さて、弥生時代中期前半の遺構は、奥の坊遺跡の南西側に位置する奥の坊権現前遺跡にも少数ながら認められる。奥の坊権現前遺跡の発掘調査では、竪穴建物跡2棟と土坑などを検出している。帰属時期や遺構の分布から、奥の坊権現前遺跡の弥生時代中期前半の遺構は、奥の坊遺跡の同一時期の遺構と一連のものと考えられ、その見方が正しければ当集落の南西端付近の状況を示すものと考えられる。なお、当集落の北限については、奥の坊遺跡のⅦ区より北側で当該期の遺構を検出していないことから、Ⅶ区の北端が集落の北限の可能性が高い。一方、集落の南東端は、当該期の遺構の検出状況より奥の坊遺跡のI区北西側付近と考えられる。

弥生時代後期 エリアAでは奥の坊権現前遺跡の発掘調査で、弥生時代後期前半の竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡2棟、土坑などを検出している。とりわけ、4棟検出した竪穴建物跡は弧状に配置されており、その内側にある西側に棟持柱を有する掘立柱建物跡が位置する。なお、掘立柱建物跡の周囲には、L字状に掘削された溝が認められた。奥の坊権現前遺跡の当該期の集落は、遺構の平面分布から、事業地のさらに西側に展開するものと考えられ、その見方が正しければ、当調査地は集落の東端の状況を示すものと考えられる。

古墳時代～古代 エリアAの周辺では古墳時代の終末期を中心として、丘陵上での造墓活動が活発化する。奥の坊遺跡の集落のすぐ東側の丘陵上では、調査時にすでに削平されていたものの奥ノ坊1号墳を含めて4基の古墳を確認した。1号墳は標高46～47mの場所に立地していたようで、墳形は円墳と推定される。1号墳の時期は、昭和40年の開墾時に出土した須恵器平瓶を根拠として7世紀中頃～後葉であると考えられる。奥ノ坊2号墳は、調査によって弧状に周溝を検出しており、その規模と配置から直径10m程度の円墳と見られる。埋葬施設はすでに流失していたが、横穴式石室と推定される。2号墳の時期は、推定しうる遺物が存在しないことから不明である。奥ノ坊3号墳は2号墳に隣接した場所に位置し、2号墳と同様の状況であることから直径11m程度の円墳と考えられる。埋葬施設は、推定となるが横穴式石室と考えられる。3号墳の時期は、周溝から出土した須恵器蓋から、TK217併行期と考えられる。奥ノ坊4号墳は尾根頂部に位置し、弧状に巡る周溝の規模と配置から、直径8m程度の円墳と考えられる。4号墳は近世以降の墓に削平されているため埋葬施設を失うが、その墓に転用されていた石材から横穴式石室であったと考えられる。4号墳の時期は、遺物がないため不明である。

奥ノ坊古墳群から東へ目を転じると、谷部を挟んでさらに東側に丘陵地が認められる。そこには金川淵古墳が所在する。金川淵古墳は北側の丘陵から南へ舌状に延びる丘陵の先端部最高所に位置し、標高は約96mである。発掘調査によって幅1.3m、深さ0.2mの周溝を検出しており、周溝の配置から直径10m程度の円墳の可能性が高いと考えられる。金川淵古墳の時期は、時期を推定しうる遺物が出土していないため不明である。

一方、エリアAの集落について見ると、奥の坊権現前遺跡の発掘調査では、7世紀後半頃と考えられる竪穴建物跡、掘立柱建物跡や溝などを検出している。また、奥の坊遺跡の南西側の調査でも、同時期と考えられる竪を持った竪穴建物跡（SH52001）を1棟検出している。これらの時期の遺構はそれほど濃密には分布しないが、奥の坊権現前遺跡よりもさらに西側にも展開するようだ。

中世以降 奥の坊権現前遺跡では、中世に帰属する遺物が出土しているが、当該期の遺構については明確に検出していない。また、同遺跡では近世以降の耕作に伴う鋤溝や掘立柱建物跡などが認められ、奥

の坊遺跡でも近世以降の居住に関わる遺構などを検出している。また、奥ノ坊古墳群が築造された丘陵上には、古墳の廃絶後の近世に造墓が行われており、近世以降、再び墓域としての土地利用に転じている。

以上見たように、エリアAの土地利用にはおおむね4時期あることが判明した。最初の土地利用は、奥の坊遺跡の成立、すなわち当地の中心的な集落の形成がなされる弥生時代中期前半、次は奥の坊遺跡よりも西側に居住空間の中心を移す奥の坊権現前遺跡の集落の形成がなされる弥生時代後期前半、次は古墳時代の終末期から古代にかけて丘陵上に奥の坊古墳群が成立し、その下の地形面上に7世紀後半の集落（奥の坊遺跡・奥の坊権現前遺跡）が成立する時期、最後が中世以降に大半の土地が耕作化され、一部で近世段階に居住区と丘陵上で墓域が成立する段階、以上を読み取ることができる。

b. エリアBとその周辺の遺跡

エリアBでは縄文時代後期、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期、中世、近世の遺構が認められた。
縄文時代後期 縄文時代後期の遺構は、奥の坊奥池西遺跡で落とし穴の可能性がある遺構を複数検出している。この点から、当該期に当地の土地利用が開始された可能性が高いと考えられる。

弥生時代中期 弥生時代中期の遺構は、大空北遺跡で竪穴建物跡や溝などの遺構を検出した。しかし、当該期の遺物の出土量は少なく詳細は不明である。

弥生時代後期 弥生時代後期の遺構は、奥の坊奥池西遺跡で土坑と当該期の可能性がある竪穴建物跡を1棟確認した。遺構数や遺物の出土量などから、奥の坊奥池西遺跡は奥の坊権現前遺跡とはほぼ同時期の小規模な集落であると考えられる。

古墳時代 古墳時代に帰属する遺跡として、大空古墳が存在する。大空古墳は大空遺跡から北へ延びる丘陵の延長部に位置する古墳で、標高は約77.5mである。当該事業では大空古墳の南半部分のみを調査したが、全長約11mの円墳であることを確認した。周溝の幅は1.25m、深さ0.5mである。未確認ではあるが、墓道などの位置関係から、埋葬施設は東側に開口する横穴式石室と考えられる。大空古墳の推定期は、古墳時代後期である。

中世以降 中世と近世以降の遺構については、奥の坊奥池西遺跡で溝や掘立柱建物跡などを検出している。

エリアBで特筆すべき点は、縄文時代の可能性がある遺構を確認した点である。このことから、エリアBの土地利用の開始がエリアAに先行する可能性が高いと考えられる。また、エリアBにおいて弥生時代中期には奥の坊遺跡のような一定規模の集落は形成されていないようだが、弥生時代後期にはエリアAと同時期と考えられる集落が成立している点は看過できない。

以上、双方の遺跡の状況を整理したが、地形の状況やそれに規制された土地利用の様子が明らかとなった。奥の坊遺跡は、弥生時代中期前半に一定規模の集落を形成するが、長期間は営まれず、その後、遺跡の周辺で弥生時代後期や古代に規模のそれほど大きくなない集落が営まれる。また、周辺の丘陵上では古墳時代後期から終末期にかけて造墓活動が活発化する様子を読み取れた。また、近世以降も耕作地として利用される反面、一部で屋敷地や墓域として利用されていた状況も明らかとなった。

引用文献（遺跡別）

（奥の坊遺跡）

高松市教育委員会2006「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5番 奥の坊遺跡群V（奥の坊遺跡1・II区）」

高松市教育委員会2007「高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6番 奥の坊遺跡群VI（奥の坊遺跡VI区）」

高松市教育委員会2009「高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7番 奥の坊遺跡群VII（奥の坊遺跡VII・IX・X・XI区）」

高松市教育委員会2010「高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8番 奥の坊遺跡群VIII（奥の坊遺跡VIII区）」

高松市教育委員会2011「高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第9番 奥の坊遺跡群IX（奥の坊遺跡IX区）」

高松市教育委員会2012「高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第10番 奥の坊遺跡群X（奥の坊遺跡VI区 遺物包含層出土遺物編）」

（奥の坊権現前遺跡）

高松市教育委員会2004「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2番 奥の坊遺跡群II（奥の坊権現前遺跡）」

（金川洞古墳）

高松市教育委員会1999「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1番 奥の坊遺跡群I（奥の坊地区（試掘）大空古墳 金川洞古墳）」

（奥ノ坊古墳群）

高松市教育委員会2006「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4番 奥の坊古墳群IV（奥の坊古墳群・久米池遺跡）」

（大空北遺跡）

高松市教育委員会2004「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3番 奥の坊遺跡群III（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）」

（奥の坊奥池西遺跡）

高松市教育委員会2004「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3番 奥の坊遺跡群III（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）」

（大空古墳）

高松市教育委員会1999「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1番 奥の坊遺跡群I（奥の坊地区（試掘）大空古墳 金川洞古墳）」

第4章 調査の概要

第1節 調査地の概要

III区は、平成22・23年度に調査成果を報告したVI区の南側隣接地にあたり、丘陵からの緩斜面に位置する調査区である。北側に隣接するVI・VII区では、弥生時代中期前半の集落を検出しており、III区でもおもにこれと同時期の遺構・遺物が出土した。従って、III区の遺構・遺物についても、一連の集落に帰属すると見て良いだろう。III区は、地形的に見ると、VI・VII区よりもより平坦な地形上面に位置する。

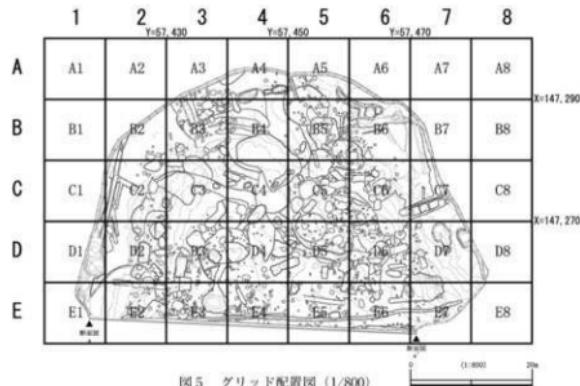


図5 グリッド配置図 (1:800)

第2節 調査区の概要と調査方法

III区では、事業対象地内に台形に近い形状の調査区を設けた(図5)。調査区の北側はやや不整形だが、調査面積は約2,170m²である。当地区では遺構面を二面検出しており、調査の手順・方法は、後述する基本層序のI・II層をバックホウで掘削し、III層上面で遺構検出とその掘削を人力で行った(第一遺構面)。第一遺構面の調査終了後に、遺物を回収しながらIII層を人力で掘削し、その下位に堆積するIV層上面で遺構を検出し調査した(第二遺構面)。遺構の実測は、国土座標に従って設定した10m四方のグリッドを用いた。このグリッドにはアルファベットとアラビア数字を組み合わせたグリッド名を付している。

遺構番号については、まず遺構の種類ごとに略号(SH, SKなど)を冠し、次に遺構面が二面あることから、調査区番号・遺構面数の順に数字を冠した。最後に遺構の種類ごとに001から順に遺構番号を与えた。例えば、第一遺構面で一番目に検出した土坑は、SK31001ということになる。

第3節 基本層序

III区の基本層序は、おおむね4層に大別できる(図6)。I層は現代耕作土で層厚約5~40cmである。II層はI層以前に形成された耕作土(旧耕作土)で、層厚が約45~90cmである。III層は弥生時代中期の遺物を多量に含む遺物包含層で、層相の観察から当地区的上流部にあたるVI・VII区の遺物包含層に対応する土層と考えられる。III層の層厚は約5~60cmで、調査区の中央付近により厚く堆積する傾向を観察した。また、III層の分布範囲は、西・東端でそれぞれ調査区の端から5m程度帯状に空白域が認められた以外は、広く分布していた。IV層は、当地の基層をなす自然堆積層(地山)である。

さて、III区におけるIV層上面の標高を南壁断面図で確認すると、調査区の西・東側が高くおおむね標高41.0~41.2m、それよりも低い調査区中央付近で標高約40.1mと1m前後の比高差が認められる。このため、地形的に低い調査区中央付近が最も厚くIII層の堆積する地点であることが分かる。この地形面の傾向と遺物包含層の堆積状況は、北側に隣接するVI区でも認められた。なお、III層はその上面で近世以降に形成された遺構を検出できることから、少なくとも近世以前に堆積したことが分かる。また、IV層上面においても弥生時代中期を中心とした遺構が広く分布する。

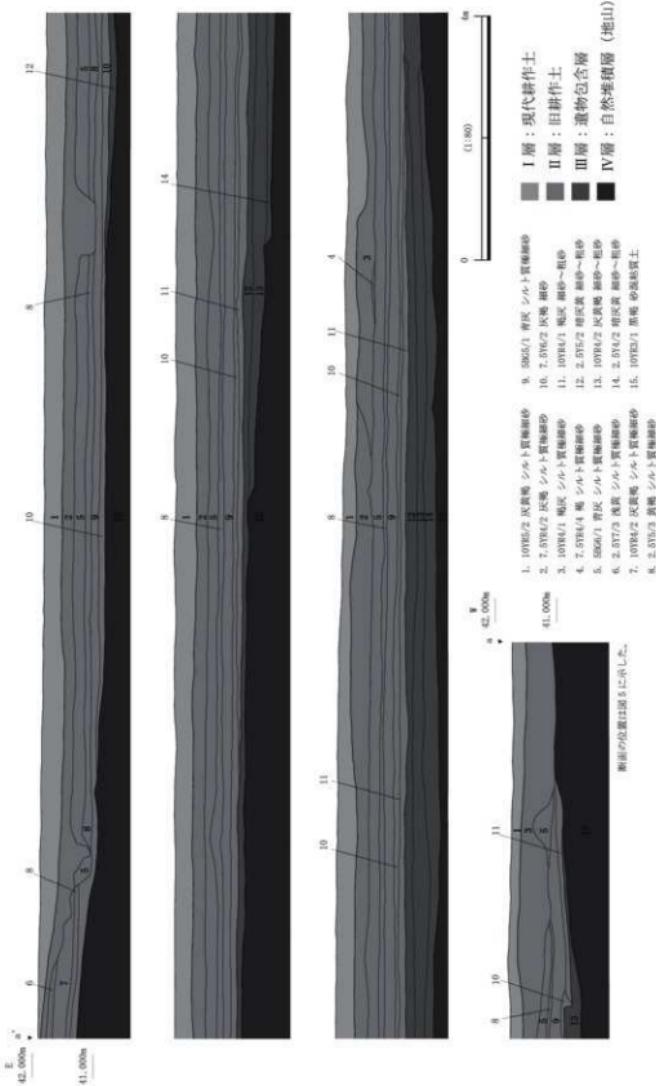


図6 湿生区耕作土断面図(1/80)

第5章 調査成果

第1節 各調査面の概要

Ⅲ区では、合計二面の遺構面を確認した。上位の遺構検出面を第一遺構面、下位の遺構検出面を第二遺構面とする。第一遺構面はⅢ層上面に相当し、近世以降の遺構・遺物が認められた。検出した遺構は土坑・ピット・井戸・溝で、居住や耕作に関わる遺構と位置づけられる。第二遺構面はⅣ層上面に相当し、弥生時代中期と一部古墳時代の遺構・遺物が認められた。弥生時代の遺構については、堅穴建物跡・土坑・溝・ピットなどを検出し、隣接する地区の遺構と同一の集落に伴うものと考えられる。

第2節 第一遺構面の調査成果

検出遺構の概要（図7）

第一遺構面で検出した遺構は、調査区南側中央付近を除くその他の場所に分布する。とりわけ、調査区東半の遺構密度は他の箇所と比べると高いものと言える。第一遺構面では、土坑・ピット・井戸・溝を検出しているが、土坑・ピット・井戸などの居住に関連する遺構は調査区東側に分布が偏る傾向が読み取れる。よって、調査区東半の遺構分布状況は、Ⅲ区のさらに東側に近世以降にかけての居住地が展開する可能性を推定させる。なお、以下に遺構の調査成果を報告するが、第一遺構面ではおもな遺構のみ記載する。また、遺構の深さについては、いずれも検出面からの深さを示す。

a. 土坑

SK31003（図8、写真1・2） 調査区南東側に位置し、土坑の内部に土器を設置した遺構である。掘り形は円形で、直径約1.25m、深さ約0.36mである。埋土は細分できるが、おおむね設置された土器内部の土層と掘り形埋土の2層に大別できる。

SK31004（図8） SK31005のすぐ南側に位置し、土器片が多量に出土した土坑である。掘り形はほぼ円形で、直径約1.02m、深さ約0.25mで、埋土は2層に細分できる。

SK31005（図8） SK31004のすぐ北側に位置する土坑である。掘り形は円形で、直径約1.0m、深さは約0.4mである。埋土は5層に細分でき、最上層が砂質、それより下位が粘性のある土で埋没する。

SK31009（図8） 調査区中央東側で検出した土坑で、SE31001の北側に隣接して掘削された遺構である。掘り形はほぼ円形で、直径約1.25m、深さ約0.41mで、埋土は8層に細分できる。このうち、最上層は砂が混じる土質だが、それよりも下位の土層は粘性が強い点が特徴である。

SK31011（図8） 調査区北東側に位置する土坑である。すぐ北側のSK31012に掘り形の一部が破壊されることから、SK31011はSK31012に先行して掘削された遺構であることが分かる。SK31011の掘り形はほぼ円形で、直径約1.05m、深さ約0.32mである。土坑の底部に土器を据えつけており、埋土は土器内部の土層と掘り形埋土の2層に大別できる。

SK31012（図8） 調査区北東側に位置する土坑である。掘り形は梢円形で、短軸約1.04m、長軸約1.25m、深さ約0.6mである。埋土の特徴として、最下層に粗砂が約25cmの厚さで堆積する点が挙げられる。

SK31015（図8） 調査区中央東側に位置し、SK31009の西側に掘削された遺構である。掘り形は溝状を呈し、短軸約0.62m、長軸約1.7m、深さは最深部で約0.3mである。SK31015の断面形状は台形に近く、埋土は2層に分かれる。

b. 井戸

SE31001（図9） 調査区東側中央付近に位置し、SK31009の南側に隣接して掘削される。掘り形は円形で、直径約1.43m、深さ約0.45mである。掘り形の内部には、直径約1.0mの円形の木枠を設置して井戸側とする。埋土は、井戸側内部の土層と掘り形埋土の2層に大別でき、とくに井戸側内部の土層は砂質である点が観察できた。この点から、井戸内部は一定期間漏水していたものと見られる。

c. ピット

ピットの平面分布は調査区東側と北側に偏る傾向が認められ、ピットの規模は直径約0.2～0.4mである。ピットの平面分布の傾向から、検出した土坑や井戸と関連して、当地の居住に関わる遺構と考えられる。

d. 溝（写真3・4）

第一遺構面で検出した溝の大半は、耕作に関わる溝の可能性が高い。溝のなかでも重複関係を有するものがあるため、時期的な前後差を持って掘削されたことが分かる。ただし、SD31017については他の溝と性格が異なるようで、内部に土管が設置されており、排水などを目的とした遺構と考えられる。土管の存在から推定できるように、SD31017の構築時期は近代以降と考えられる。

SD31017は調査区東側中央付近に東西方向に掘削された溝で、幅は0.5m程度、内部に設置された土管の長さは90cm程度、直径は10cm程度である。

第3節 第二遺構面の調査成果

検出遺構の概要（図10、図版1～3）

第二遺構面は多数の遺構が掘削されており、遺構の性格を1基ずつ厳密に判断することは困難であった。よって、堅穴建物跡など特定の遺構以外はある程度機械的に遺構の性格を判別するため、遺構の規模を判断基準のひとつとした。その基準は、土坑の場合は長軸の長さがおおむね50cm以上、ピットの場合はそれ以下である。報告にあたっては、調査担当者が調査した時点で遺構の性格を判断した所見を最大限に尊重したが、とくに土坑と判断したもののなかで掘り形の規模が大きいなどの理由から、土坑とは異なる可能性が考えられた遺構については、整理時に番号は変更せずに遺構の種類のみ変更した。

第二遺構面では弥生時代中期を主体とする遺構と一部に古墳時代の遺構を検出した。居住に関する遺構の中心をなす堅穴建物跡については5棟を認識したが、堅穴建物以外の遺構のなかで掘り形が非常に大きい遺構が複数存在した。その遺構についても、堅穴建物跡になる可能性があるが、堅穴建物跡と言えるだけの根拠もないため、そのような遺構については性格不明遺構（SX）として報告する。

その他の検出遺構は、土坑・ピット・溝であるが、遺構の分布密度は北側に隣接するⅥ区よりも低い。ちなみに、Ⅲ区の遺構から出土した遺物については、Ⅵ区の遺構出土遺物とおおむね同時期であることから、これら遺構を一連の集落に伴う遺構と評価しても大過ないだろう。この見方が正しければ、Ⅲ区は弥生時代中期に営まれた集落の範囲内と言うことができる。

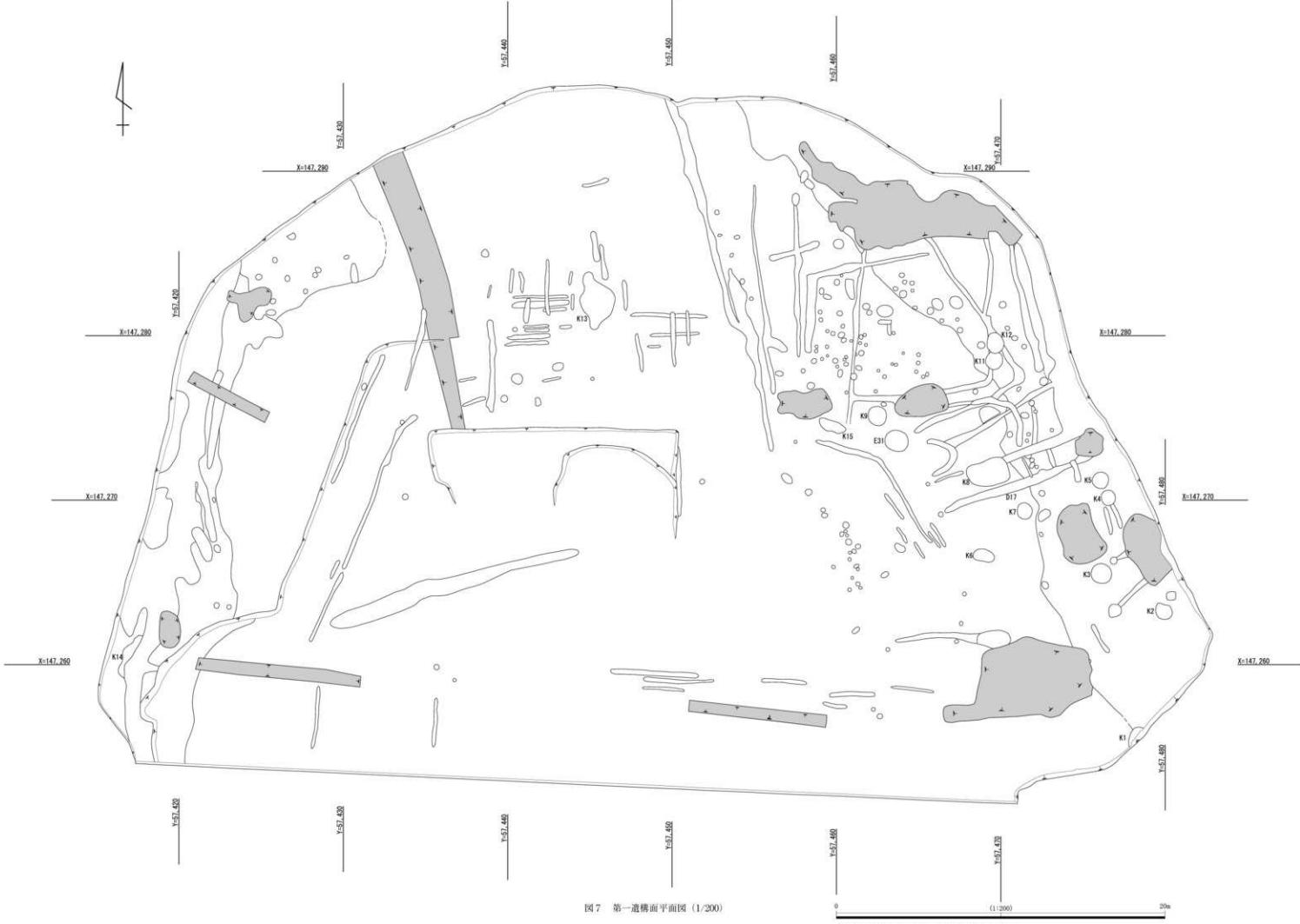
さて、Ⅲ区の第二遺構面の遺構は、多少の粗密はあるものの調査区全域に分布する。このうち、堅穴建物跡については調査区中央で南北方向に構築されていることが読み取れる。これは、調査区東・西端が多少の斜面地になっていることと関連しているものと考えられ、より生活しやすい地形面上を選んで建物を構築したことが予想される。この傾向は、Ⅵ区の地形面と堅穴建物跡の関係と同様である。

以下の報告にあたって、堅穴建物跡についてはすべての遺構図を掲載して詳細を述べるが、土坑については検出数が多いため遺物が多数出土したものなどを中心に記載し、その他の土坑は図面のみ報告する。ピットと溝についても同様の理由から、調査区全体の平面図で平面的な情報を示し報告とする。なお、遺構の記載では、いずれの遺構も検出面での計測値を示す。

a. 堅穴建物跡

SH32001（図11、図版4） 調査区北側中央付近で検出した。掘り形の一部を近年の搅乱に破壊され、また掘り形の東側と南側の一部をそれぞれSK32004とSH32002によって破壊される。遺存する部分で確認すると、掘り形が円形の堅穴建物跡と判断できる。SH31001の直径は最小値で約6.6m、最大値で約7.6m、深さは約0.3mで、床面積は35m²程度である。SH32001に貼り床は認められず、住居埋土を除去すると床面が露出する。床面では土坑（SK-1）や多数のピット、溝（SD-1）を検出した。SK-1は建物の南側に位置し、SH32002によって南側の一部を破壊される。SK-1の形状は楕円形に近く、短軸は約1.42m、深さは約0.04mである。主柱穴については明瞭ではなく、SP-1・4・10・14からなる4本主柱になる可能性と、SP-1・13・21・22など住居の壁面沿いに柱を配置する可能性の双方が考えられるが、いずれも柱穴の配置がやや不規則であるため断定はできない。壁溝については、可能性があるものとしてSD-1を挙げることができる。ただし、SD-1の検出長は約1.2mで、住居の壁面付近でそれ以上を検出できないため、これも壁溝であることを断定するには至らなかった。なお、SD-1の幅は約0.2m、深さは床面から約0.1mである。

遺物は、建物の東側で比較的まとまって弥生土器の壺・壺や石器などが出土した。



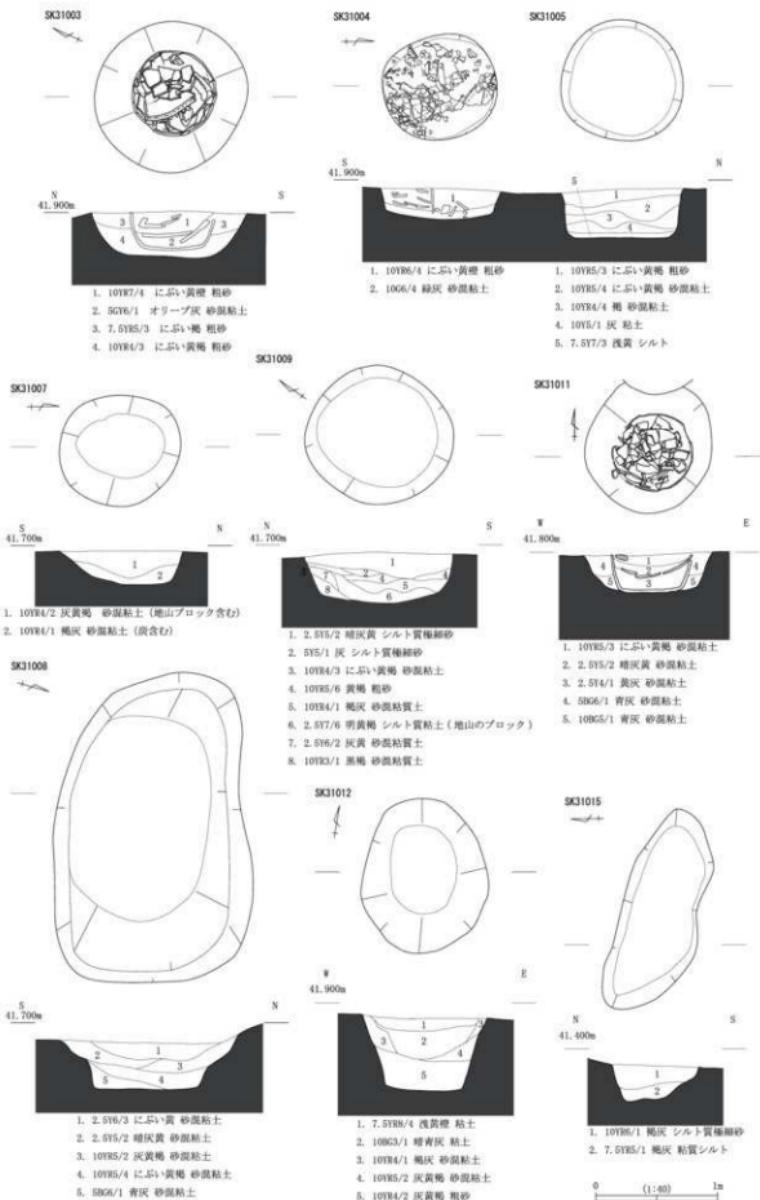


図8 第一造構面検出造構 実測図1 (1/40)

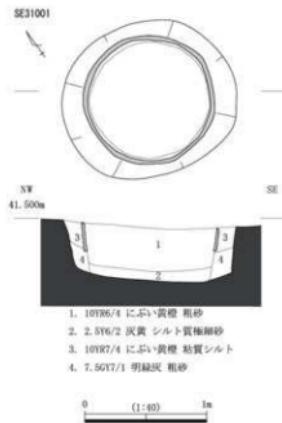


図9 第一遺構面検出遺構 実測図2 (1/40)

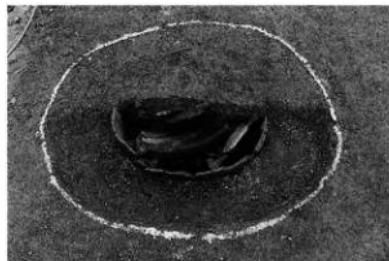


写真1 SK31003 断面（南から）



写真2 SK31003 全景（南から）



写真3 SD31017 土管出土状況（西から）



写真4 SD31017 土管出土状況（南から）



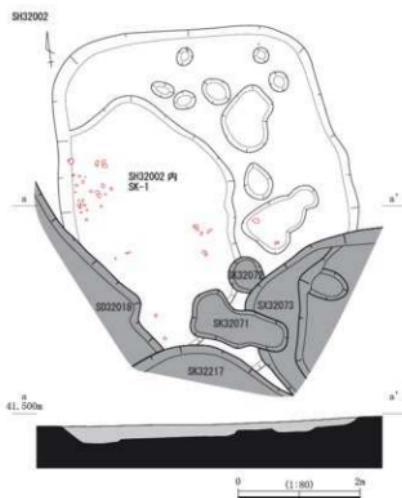
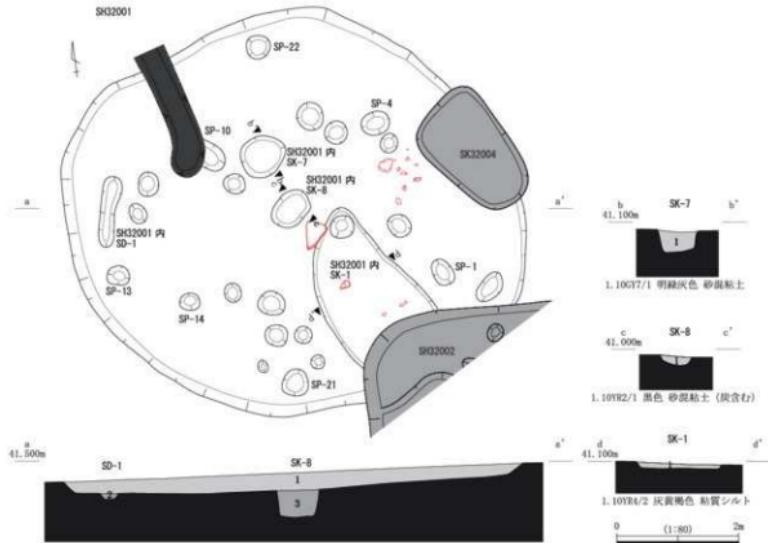


図11 第二遺構面検出遺構 災測図1 (1/80)

SH32002 (図11、図版4・5) SH32001の南側に構築された竪穴建物跡で、遺構の重複関係よりSH32001よりも新しい建物であることが分かる。これ以外にも、SH32002が廃絶した後に掘削されたSK32071・SK32217・SX32073・SD32018に破壊されるため、とくに建物の南端の状況は不明である。SH32002の掘り形は確認できる箇所を見る限りは方形に近く、建物の北東・北西隅は丸みを持つ。掘り形の東西長は約4.8m、床面までの深さは約0.12mである。

断面の観察では貼り床は認められなかったが、床面が西に向けて低くなることから、建物の機能時に貼り床が存在した可能性は否定できない。床面に掘削された遺構は、土坑やピットなどがある。土坑のうち、SK-1は建物の西側に位置し、二段落ちの形状を呈して建物の西壁付近でさらにもうひとつ土坑状の落ち込みとなる。SK-1の機能として、掘削された位置関係から貯蔵穴になる可能性も考えられるが、断定できない。なお、SK-1からは西壁付近の落ち込み内から土器片が出土した。ピットについては、建物の壁面沿いに位置するものが数基認められるが、いずれも主柱穴になるかは断定できなかった。

遺物は、住居埋土から弥生土器の甕や壺、ピットから弥生土器の蓋、SK-1から弥生土器の甕・底部や石器などが出土した。

SH32003 (図12、図版5) 調査区中央付近に位置し、SD32001の東側に構築された竪穴建物跡である。遺構の重複関係を見ると、SH32003がSK32232を破壊して造られていることから、SH32003はSK32232の埋没後に構築された遺構と言える。SK-1の掘り形は円形で、短軸約4.8m、長軸約5.2m、床面までの深さは約0.14mで、床面積はおよそ20m²である。SH32003でも断面観察で貼り床は認められなかった。床面の検出遺構は、土坑（SK-1）とピットがある。SK-1は建物の中央やや西側に位置し、掘り形の形状は北東側がやや窪む円形である。SK-1の短軸は約1.0m、長軸は約1.1m、深さは最深部で約0.3mである。ピットについては床面で15基を検出しており、このうち建物の壁面沿いに掘削された8基が主柱穴になる可能性が高い。この見方が正しければ、SH32003は建物の壁面沿いに主柱穴を配置した構造と考えられる。なお、これら柱穴の心々間の距離は、1.2～1.7m程度である。

遺物は、住居埋土から弥生土器の甕・壺や石器などが出土した。

SH32004 (図12、図版6) 調査区中央やや南側に位置し、SH32005の東側に隣接して構築された竪穴建物跡である。遺構の重複関係から、SH32004はSH32005に先行して造られた建物であることが分かる。また、その他の遺構とも重複関係を有しており、SH32004はSK32105とSD32001よりも古く、SK32106よりも新しい遺構であることが分かる。SH32004の掘り形は南側が著しく突出する不整形な形状である。この遺構の形状から複数の遺構が重複している可能性も想定したが、現地調査では認識できなかった。SH32004の東西長は約4.6m、床面までの深さは約0.18mである。断面観察では貼り床は認められなかった。床面では7基のピットを検出し、ピットの直径は約0.2～0.35mで、その配置に規則性を見出すことはできなかった。従って、SH32004の主柱穴を明らかにすることはできなかった。

遺物は、弥生土器の甕や石器などが出土した。

SH32005 (図13、図版6) SH32004の西側に位置し、SH32004・SK32050・SX32054を破壊して構築される竪穴建物跡である。SH32005の掘り形は東西方向にやや長い円形で、短軸約5.9m、長軸約7.1m、床面までの深さは約0.14mで、床面積は約30m²である。断面観察では貼り床は認められず、床面では土坑を3基（SK-1～3）とピットを24基検出した。SK-1は建物内の南西隅に位置する円形の土坑で、短軸約1.94m、長軸約2.6m、深さ約0.18mで、埋土は炭化物が混じる黒褐色砂混じり粘質土の単層である。SK-1内部からは土器片が多数出土した。SK-2は建物中央やや北西側に位置する土坑である。掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.96m、長軸約1.46m、深さ約0.14mである。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層で、土坑内部から土器片が出土した。SK-3はSK-2に北側の一部を破壊される掘り込みで、建物内の南東隅に位置する。SK-3の掘り形は不整形で、遺構の底部はなかほどで深くなる二段落ちの形状を呈する。埋土は2層に細分できるが、最上層は細砂～粗砂が堆積する。SK-3の北半からは多数の土器片が出土した。SK-1～3の性格については、掘削された位置や形状などから、貯蔵穴などとは異なる可能性が高いと考えられる。ピットについては、検出した箇所での配置に規則性を見出すことはできなかった。ただし、建物内の北東側のピットは、建物の壁面付近に位置することから、SH32003のように壁面沿いにピットを配置する建物の可能性が考えられる。

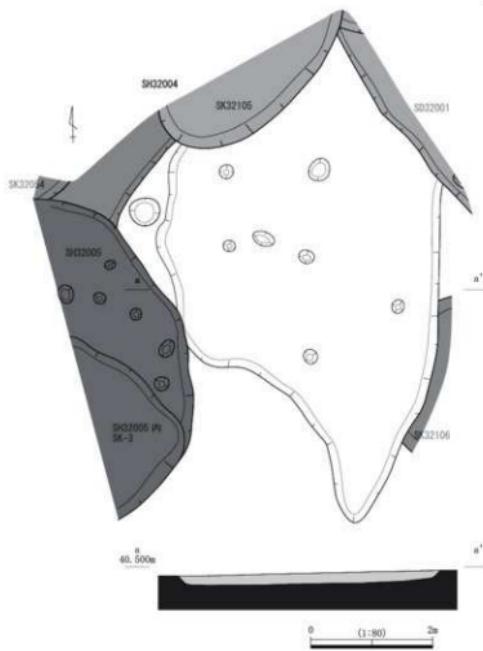
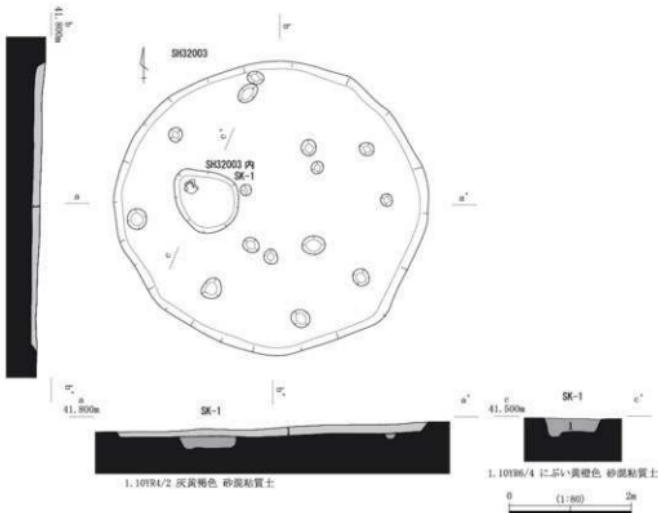


图12 第二过桥面检出过桥 宽测图 2 (1/80)

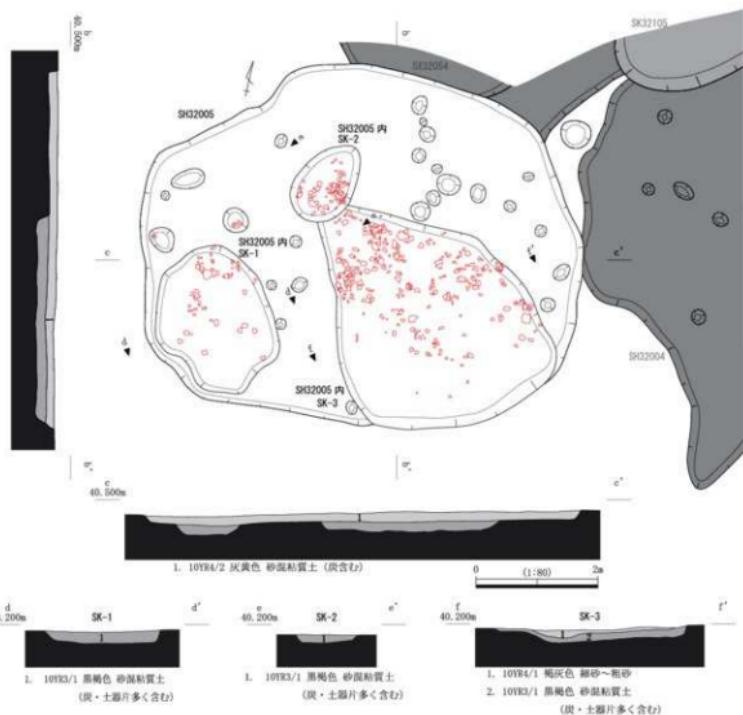


図13 第二道構面検出遺構 実測図3 (1:80)

遺物は、住居埋土から弥生土器の甕・蓋・壺や石器、SK-1～3より弥生土器の甕・壺や石器などが出土した。

b. ピット

ピットは500基程度を検出しているが、VI区と比べると分布密度は低いと言える。また、調査区全域に分布するのではなく、ある程度分布が偏る点も読み取れる。とくにピットの分布が濃密に認められたのが、SH32003の東側一帯とSH32005の南側一帯である。ピットの規模は多様だが、0.2～0.5m程度のものが多い。

c. 性格不明遺構

調査時点では土坑と判断していたが、調査後の整理段階で、遺構の規模が大きく土坑とは異なる可能性が高いと考えられたため、性格不明の遺構として報告する。

SX32054（図14） 調査区中央やや南西側で検出した遺構である。遺構の西側をSK32053、東側をSK32055、南側をSH32005に接する。確認できる部分でSX32054の掘り形は丸みを持つ方形で、東西長は約3.6m、南北長は4.6m以上、深さは約0.24mである。SX32054の南半から土器片などが多数出土した。遺構の規模が大きく、なおかつ一定量の遺物が出土したことから堅穴建物跡の可能性も考えたが、遺構底部で遺構を検出していなかったため性格は明らかにできなかった。遺物は、弥生土器の甕や壺などが出土した。

SX32059（図14） 調査区北西側で検出した遺構で、遺構の北側をSK32033、南側をSD32001によって破壊される。SX32059の掘り形は北西～南東方向に主軸を持つ楕円形で、短軸は3.3m以上、長軸は5.5m

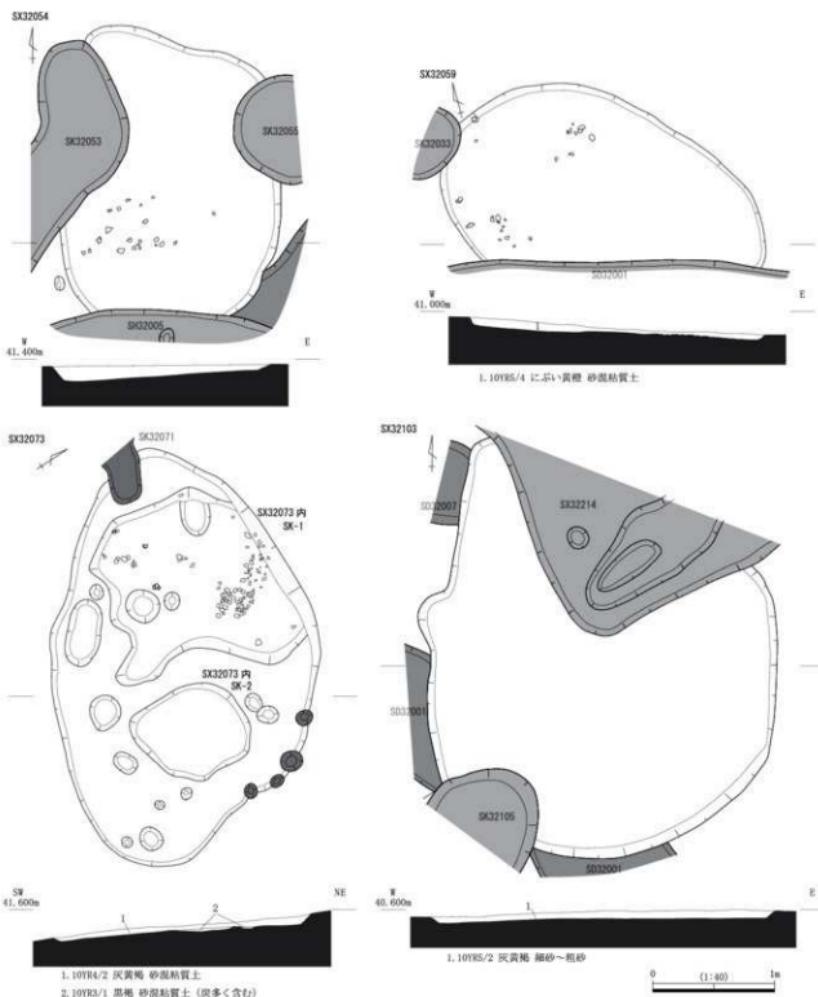


図14 第二遺構面検出遺構 実測図 4 (1/40)

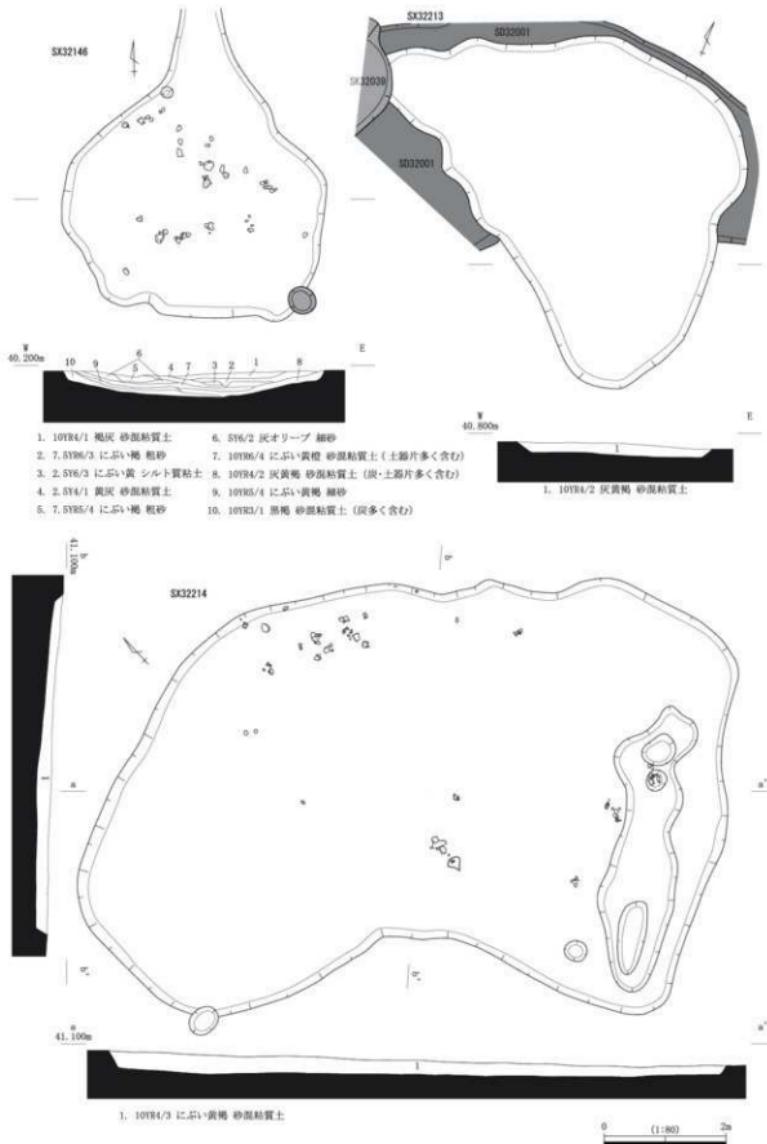


図15 第二造橋面検出遺構 実測図5 (1/80)

以上である。埋土は単層で、にぶい黄褐色砂混粘質土が堆積する。遺物は、遺構の北側と南西端付近から出土した。遺構の性格については、SX32054と同様の理由から断定できなかった。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SX32073（図14、図版7） 調査区北東側に位置し、SK32217とSH32002の一部を破壊して構築され、SK32071には北側の一部分を破壊される。SX32073の掘り形は北西～南東方向に主軸を持つ楕円形で、短軸約4.5m、長軸約7.0m、深さは約0.14mである。SX32073の床面では多数の土坑やビットを検出した。ビットは、遺構底部の南側に分布するが、その配置に規則性は認められなかった。土坑は2基掘削されていたが、北側に位置するSK-1は掘り形が大きく、なおかつ形状が不整形であった。SK-1からは多数の遺物が出土した。

SX32073の性格については、遺構の規模が大きく堅穴建物になる可能性も考えたが、主柱穴を見出すことができなかつたことから、特定することはできなかつた。

遺物は、遺構埋土から弥生土器の壺や底部、床面で検出したビットから弥生土器の壺や底部、SK-1から弥生土器の壺や壺などが出土した。

SX32103（図14、図版7） 調査区中央付近に位置し、北側の一部はSX32214によって破壊される。SX32103の掘り形は隅がやや丸みを持つ方形で、短軸約5.5m、長軸約6.9m以上、深さは約0.12mである。埋土は灰黄褐色細砂～粗砂の単層で、遺構の底部で遺構は認められなかつた。SX32103も規模が大きく、なおかつ堅穴建物が隣接する箇所に掘削されていることから堅穴建物の可能性も考えたが、建物と判断するだけの根拠に乏しいため遺構の性格は断定できなかつた。

SX32146（図15、図版8） 調査区南側中央付近に位置し、遺構の北側はSH32005に破壊される。遺構の形状は北側が溝状を呈し、南側は隅が丸みを持つ土坑状の掘り形である。溝状の部分では、幅は最小値が0.64m、最大値が1.3mである。一方、南側の土坑状の箇所の東西長は約4.3m、深さは約0.4mである。この部分の土層は10層に細分できるが、特徴的なのが炭化物を多数含む点である。なお、遺構の形状から、前後する溝と土坑が重複する可能性も想定したが、現場での観察では前後関係は認められず同一の遺構と判断した。また、溝状の掘り込みはSH32005の北側に連続して掘削されており、SD32001と合流して途切れる。この状況から、SD32001とSX32146は関連する遺構の可能性もある。SX32146からは、とくに南半の土坑状の箇所から土器片などの遺物が出土した。遺物は、弥生土器の壺・壺・高杯などである。

SX32213（図15） 調査区西側中央付近に位置し、SD32001の廃絶後に掘削された掘り込みである。さらに、遺構の北西隅をSK32039によって破壊される。SX32213の掘り形は北西側が突出する不整形な形状で、北西～南東方向に主軸を持つ。SX32213の短軸は約4.2m、長軸は約6.7m、深さは約0.2mである。

埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の鉢や底部などが出土した。

SX32214（図15） 調査区中央やや北側に位置する大型の掘り込みで、SK32069・SD32066・SX32103の廃絶後に掘削される。遺構の形状は、2基の遺構が重複するようにも見えるが、調査の結果、一連の遺構と判断した。SX32214の規模は、いずれも最大値で東西長約10.5m、南北長約9.25m、深さ約0.25mである。埋土は、にぶい黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、北側と南側から弥生土器の壺・壺、さらに鋌頭鉄斧が1点出土した。

SX32217（図16） 調査区中央やや北東側に位置し、SD32018・SK32233・SH32002の廃絶後に掘削され、SX32217の埋没後にSX32073が形成される。また、SX32217の西側は搅乱により一部を破壊される。SX32217の掘り形は南西側がやや突出する不整形な形状で、東西長約4.3m、南北長約4.9m、深さ約0.1mである。埋土は暗褐色砂混粘質土の単層である。SX32217の床面は南に向けて傾斜しており、北端と南端の高低差は約0.1mである。この床面には2基のビットが認められ、長軸が0.3～0.4mの規模である。遺構の性格については、床面でビットを検出できることと遺構の規模から堅穴建物の可能性も考えたが、それを断定する根拠に乏しいため不明である。遺物は、弥生土器の壺が出土した。

d. 土坑

Ⅲ区では多数の土坑を検出したが、多少の分布の粗密はあるものの調査区全域に分布する点が傾向として認められた。ここでは主要な土坑について記述する。

SK32004（図17） 調査区北東側に位置し、SH32001の東側の一部を破壊して掘削された土坑である。



図16 第二遺構面検出遺構 実測図6 (1:80)

SK32004の掘り形は楕円形で、短軸約1.2m、長軸約2.1m、深さ約0.1mである。断面形状は逆台形を呈する。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32006 調査区北側中央に位置し、遺構の重複関係よりSK32007とSD32222に先行して掘削された土坑である。SK32006は南半を破壊されるため全容は不明だが、確認できる箇所で掘り形は隅丸方形を呈する。SK32006の東西長は4.6m以上、南北長は5.1m以上で、遺構北側の床面は一段落ち込む。遺物は、弥生土器の壺・壺・底部などが出土した。

SK32007 (図17) 調査区北側中央に位置し、SK32006を破壊して掘削される。SK32007の掘り形は溝状を呈し、短軸約0.9m、長軸約3.6m、断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32015 (図18) 調査区北西側に位置し、SK32228の西側に隣接する土坑である。SK32015の掘り形はほぼ円形を呈し、短軸約0.7m、長軸約0.72m、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32020 (図18) 調査区北西側に位置し、SD32222の一部を破壊して掘削された土坑である。SK32020の掘り形は楕円形で、短軸約0.9m、長軸約1.05m、深さ約0.57mである。SK32020の断面形状は逆台形を呈し、埋土は4層に細分できる。埋土の最下層には粗砂が堆積することを確認した。遺物は、紡錘車などが出土した。

SK32021 (図18) 調査区北西側に位置し、SD32223の一部を破壊して掘削された土坑である。また、SK32021の南端は、SK32025によって破壊される。SK32021の掘り形は隅丸方形で、短軸約0.76m、長軸約0.78m、深さ約0.43mである。埋土は3層に細分でき、最上層には炭化物が多量に含まれる。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32023 (図18) 調査区中央北側に位置する土坑で、SD32223を破壊して掘削された土坑である。SK32023の掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.46m、長軸約1.12m、深さ約0.4mである。埋土は3層に細分でき、最上層には炭化物が多量に含まれる。遺物は、弥生土器の底部や石器などが出土した。

SK32025 (図19) 調査区北西側に位置し、SD32223を破壊して形成された土坑である。SK32025の掘り形は長方形で、短軸約0.94m、長軸約1.34m、深さ0.22m。断面形状は逆台形を呈する。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は、紡錘車などが出土した。

SK32026 (図19) 調査区北西側に位置する土坑である。SK32026の掘り形は楕円形で、短軸約0.78m、長軸約0.88m、深さ約0.2m。埋土はにぶい黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

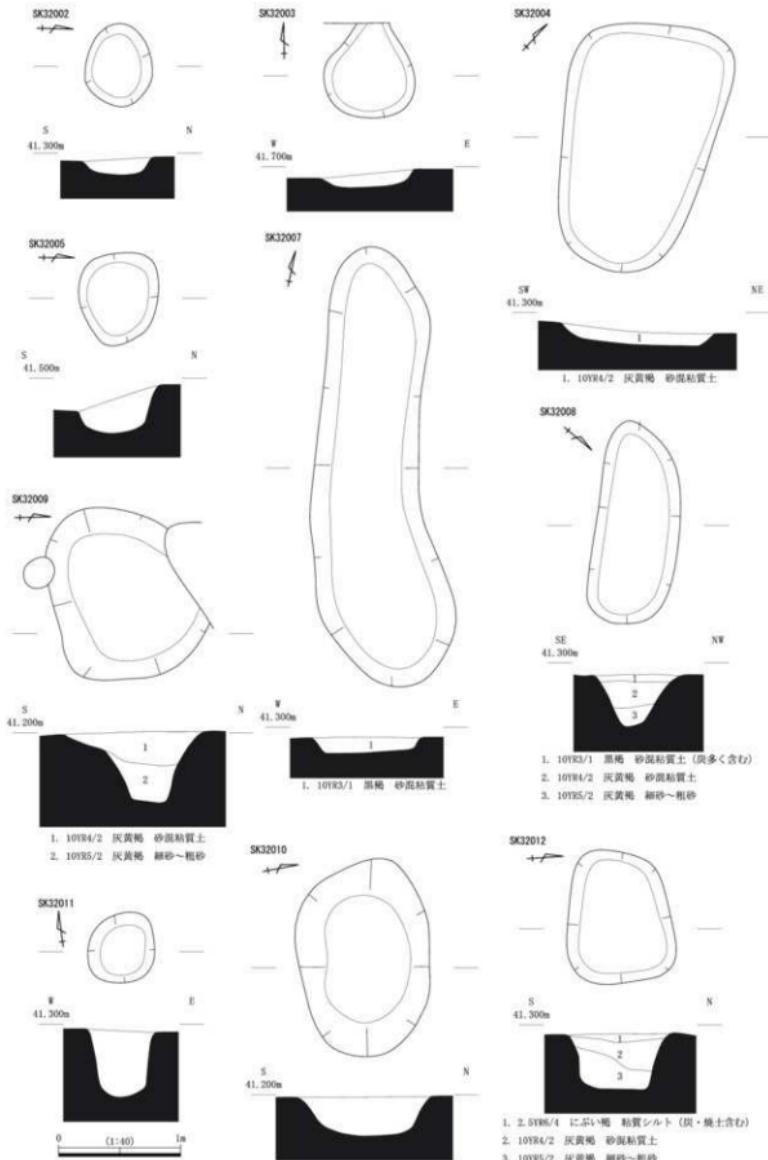


図17 第二造橋面検出遺構 実測図7 (1/40)

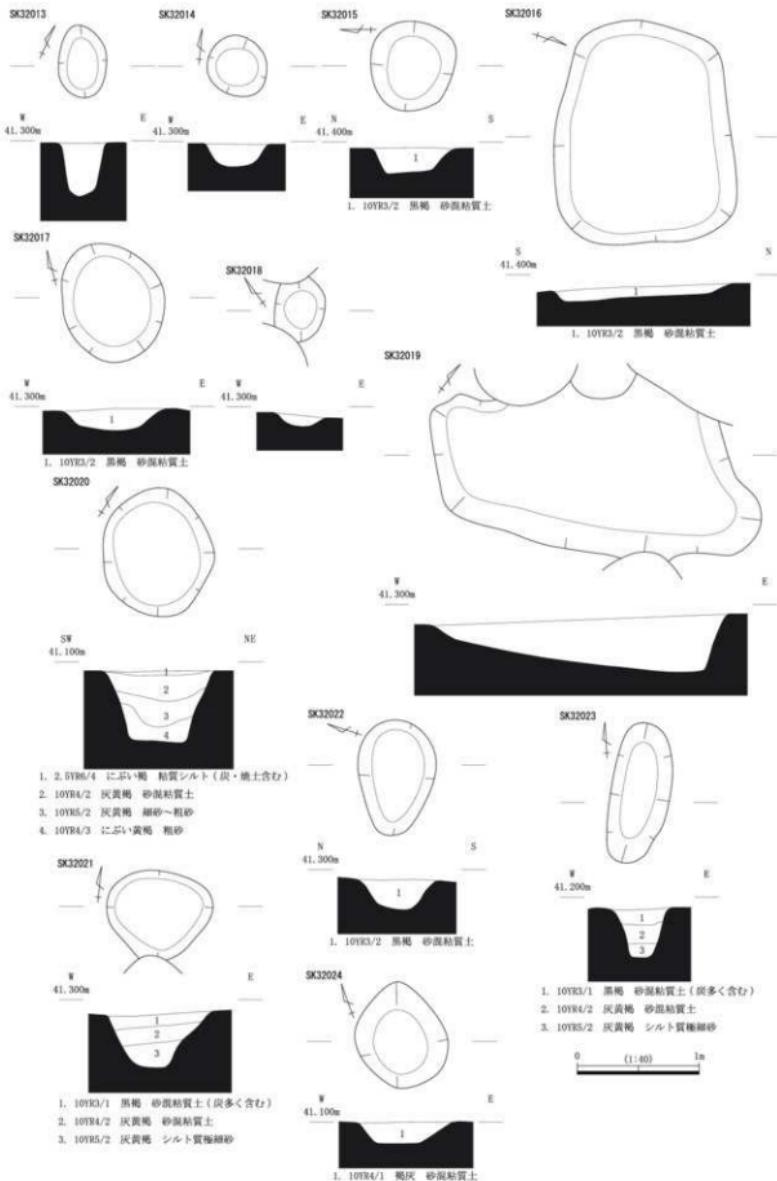


図18 第二造橋面検出遺構 実測図 8 (1/40)

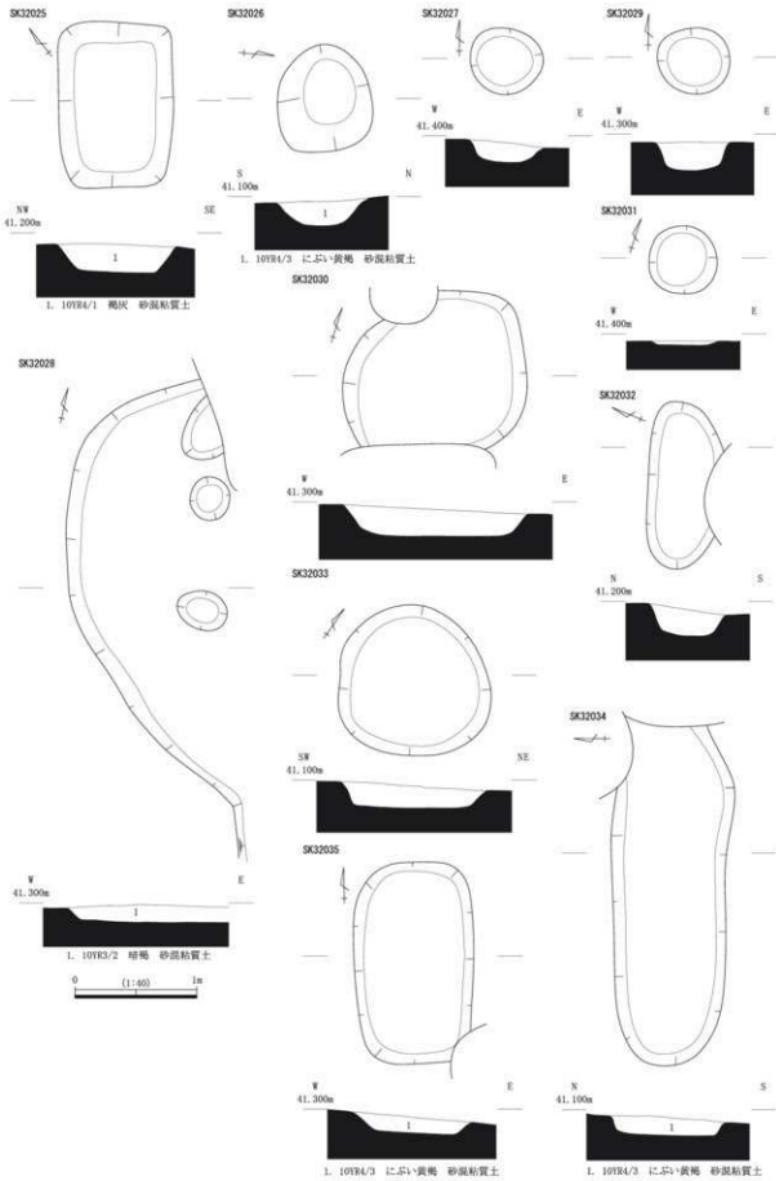


図19 第二造橋面検出構 実測図 9 (1/40)

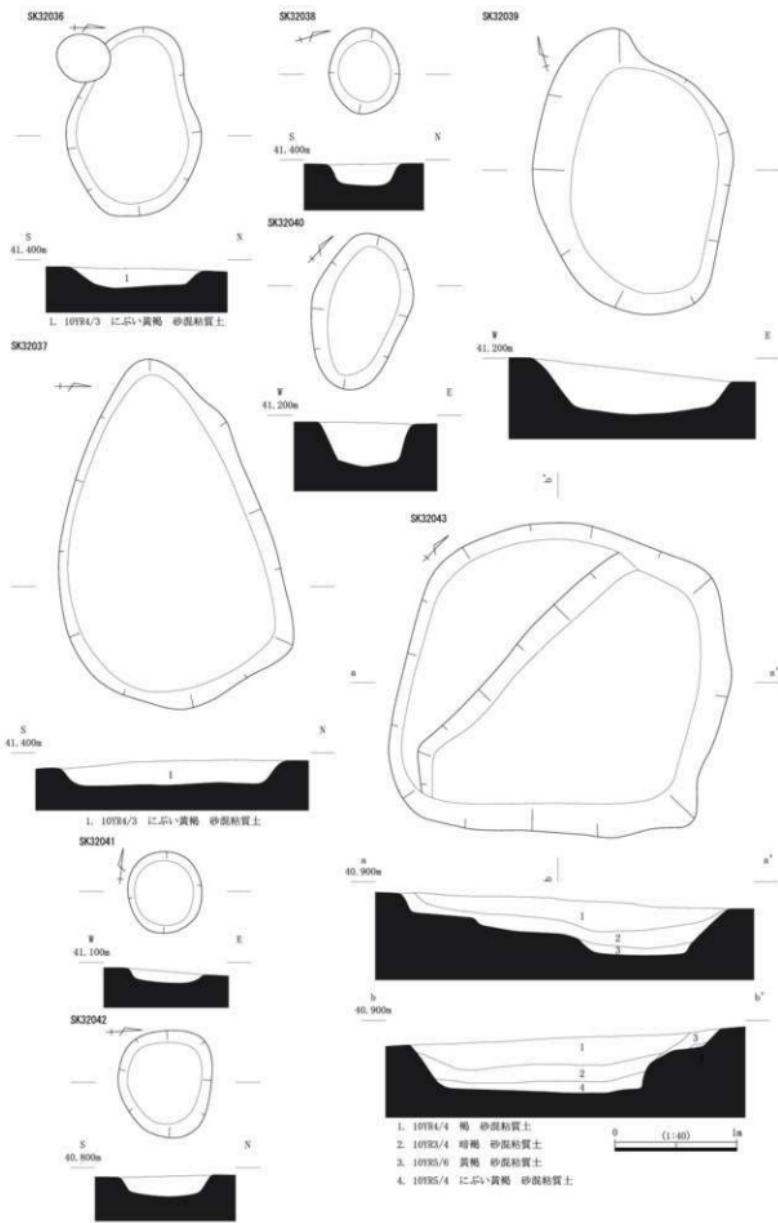


図20 第二造構面検出造構 実測図10 (1/40)

SK32038 (図20) 調査区北西側に位置し、SK32227に隣接して掘削された土坑である。SK32038の掘り形は楕円形で、短軸約0.58m、長軸約0.7m、深さ約0.18m、断面形状は逆台形を呈する。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32039 (図20) 調査区北西側に位置し、SD32001とSX32213を破壊して形成された土坑である。SK32039の掘り形は北東側がやや欠ける楕円形で、短軸約1.65m、長軸約2.37m、深さ約0.35mである。断面形状は底部中央がやや窪む逆台形である。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32043 (図20) 調査区西側に位置し、SK32044を破壊して形成された土坑である。SK32043の掘り形は四隅がやや丸みを持つ方形で、短軸約2.5m、長軸約2.7m、深さは最深部で約0.42mである。遺構の底部は、不整形に一段落ち込む特異な形状である。埋土は5層に細分できるが、いずれも褐色系の砂混粘質土が堆積する。遺物は、弥生土器の蓋や底部などが出土した。

SK32047 (図21) 調査区南西側に位置し、SK32043の南西側に掘削された土坑である。SK32047の掘り形は長方形で、短軸約1.85m、長軸約3.5m、深さ約0.25mである。土坑の底部は、西から東へとやや傾斜する。埋土は2層に細分でき、いずれも砂混粘質土である。遺物は、弥生土器の甕などが出土した。

SK32050 (図22) 調査区南西側に位置し、南東側の一部をSH32005によって破壊される土坑である。SK32050の掘り形は南東側がやや突出する不整形な形状で、東西長約2.82m、南北長約2.82m、深さ約0.15mである。断面形状は浅い逆台形で、埋土は2層に細分できる。そのうち、下層は粒径のやや小さい粘質シルトが堆積する。

SK32053 (図23) 調査区南西側に位置し、南西側の一部をSK32051によって破壊される土坑である。また、SK32053は、SK32052とSX32054が廃絶したのちに掘削された土坑である。SK32053の掘り形は溝状を呈し、北側は北西方向にやや屈曲する。SK32053の長軸は約4.7m、幅は約1.3m、深さ約0.15mである。断面形状は浅い逆台形で、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。

SK32057 (図23) 調査区中央やや北西側に位置する。SK32057の掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.98m、長軸約1.5m、深さ約0.48mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土は3層に細分できる。そのうち、最下層のみ細砂～粗砂が認められ、それよりも上位の堆積は粘性の強い土層であった。

SK32064 (図24) 調査区北西側に位置し、SK32229が埋没したのちに形成された土坑である。SK32064の掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.9m、長軸約1.4m、深さ約0.09mである。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、土坑の南西端付近から弥生土器の甕や底部が出土した。

SK32067 (図24) 調査区中央やや北側に位置し、SK32068の北東側に掘削された土坑である。SK32067の掘り形は北東～南西方向に主軸をとる溝状を呈し、短軸約1.0m、長軸約1.88m、深さ約0.24mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の底部が出土した。

SK32069 (図24) 調査区中央やや北側に位置し、SX32214に西側の一部を破壊される。遺存する部分でのSK32069の掘り形は東側がやや突出する不整形な形状で、南北長は約1.6mである。遺物は、弥生土器の甕などが出土した。

SK32071 (図24) 調査区北東側に位置し、SH32002とSX32073を破壊して形成される。SK32071の掘り形は不整形な溝状を呈し、短軸約0.6m、長軸約1.7mである。遺物は弥生土器の甕が出土した。

SK32078 (図24) 調査区北東側に位置し、西側にはSK32077が掘削される。SK32078の掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.5m、長軸約0.58m、深さ約0.09mである。遺物は、弥生土器の底部が出土した。

SK32086 (図25) 調査区東側に位置し、東半がSD32006によって破壊される。また、遺構の重複関係より、SK32086はSK32087が廃絶したのちに掘削された遺構であることが分かる。遺存する部分で、SK32086の掘り形は方形気味で、南北長約0.8m、東西長約0.82m、深さ約0.1mである。断面形状は浅い逆台形で、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32088 (図25) 調査区東側に位置し、SK32089を破壊して形成される。SK32088の掘り形は楕円形で、短軸約0.39m、長軸約0.66m、深さ約0.1mである。断面形状は浅い逆台形を呈する。遺物は、弥生土器の壺や底部が出土した。

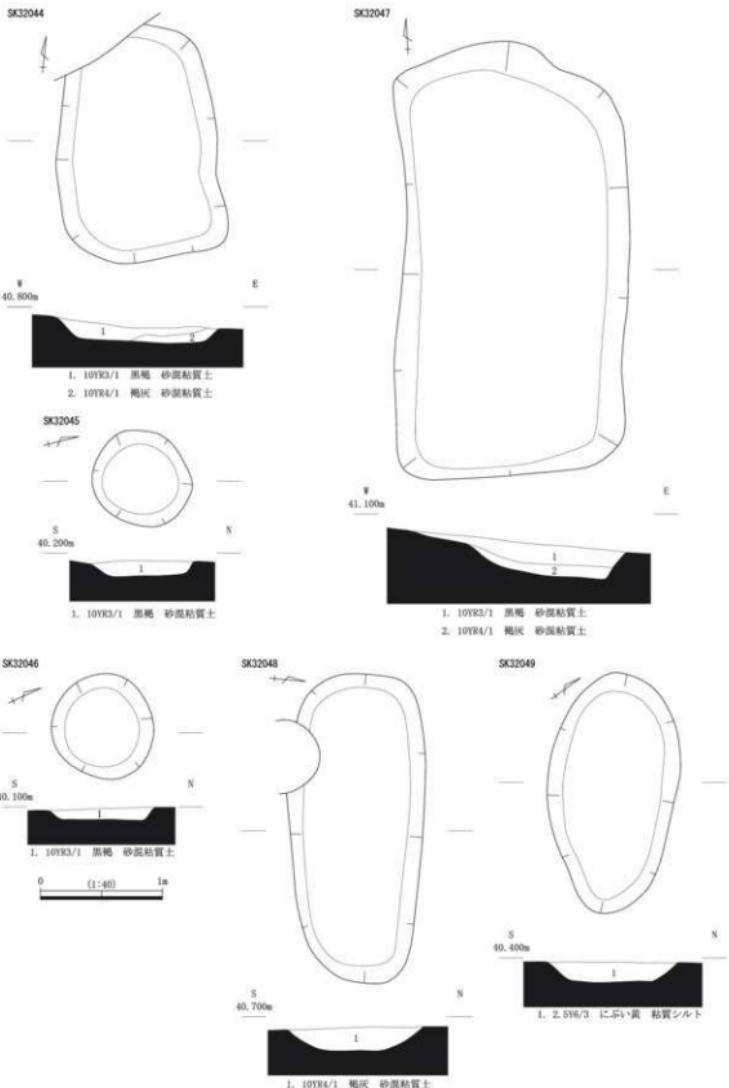


図21 第二遺構面検出遺構 実測図11 (1/40)

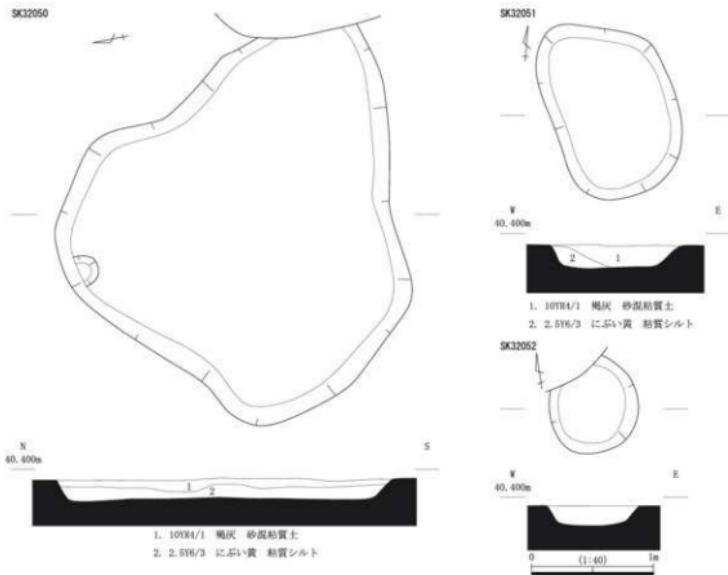


図22 第二遺構面検出遺構 実測図12 (1/40)

SK32098 (図26) 調査区中央やや東側に位置し、SH32003の北側に掘削された土坑である。SK32098の掘り形は北東～南西方向に主軸をとる溝状を呈し、短軸約1.18m、長軸約2.62m、深さ約0.15m、断面形状は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。

SK32099 (図26) 調査区中央付近に位置し、SX32103の東側に掘削された土坑である。SK32099の掘り形は隅が丸みを持つ方形で、短軸約2.7m、長軸約3.46m、深さ約0.1～0.12mである。遺構の底部は、東から西へ向けて緩やかに傾斜する。埋土は多量の焼土を含む灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の底部や石器などが出土した。

SK32100 (図27) 調査区中央付近に位置し、SK32099の北西側に掘削された土坑である。SK32100の掘り形は楕円形で、短軸約0.8m、長軸約1.33m、深さ約0.28mである。埋土は2層に細分でき、下層は細砂～粗砂が堆積する。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32102 (図27) 調査区中央付近に位置し、SK32099の南西側に掘削された土坑である。SK32102の掘り形は南側が突出する不整形な形状で、南北長約2.63m、東西長約2.17m、深さ約0.16mである。遺構の底部は、東から西へ向けて緩やかに傾斜する。埋土は多量の炭化物を含む灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32105 (図27、図版9) 調査区中央付近に位置し、SH32004やSX32103を破壊して形成された土坑である。SK32105の掘り形は楕円形で、短軸約2.06m、長軸約3.92m、深さ約0.42mである。遺構の底部は、中央に向けて窪む形状を呈する。埋土は4層に細分でき、最上層は粗砂が堆積し、それよりも下位には埋土中に炭化物が多量に含まれていた。遺物は、土坑の全体から出土しており、弥生土器の甕・壺・鉢や石器などがある。

SK32106 (図28) 調査区中央南側に位置し、SH32004に西側の一部を破壊された土坑である。SK32106の掘り形は一部を失うが不整形を呈し、短軸約2.7m、長軸約3.24m以上、深さ約0.35mである。埋土は3層に細分でき、いずれも砂混粘質土が堆積する。遺物は、弥生土器の甕などが出土した。

SK32108 (図28) 調査区中央南側に位置し、SK32107を破壊して形成された土坑である。SK32108の

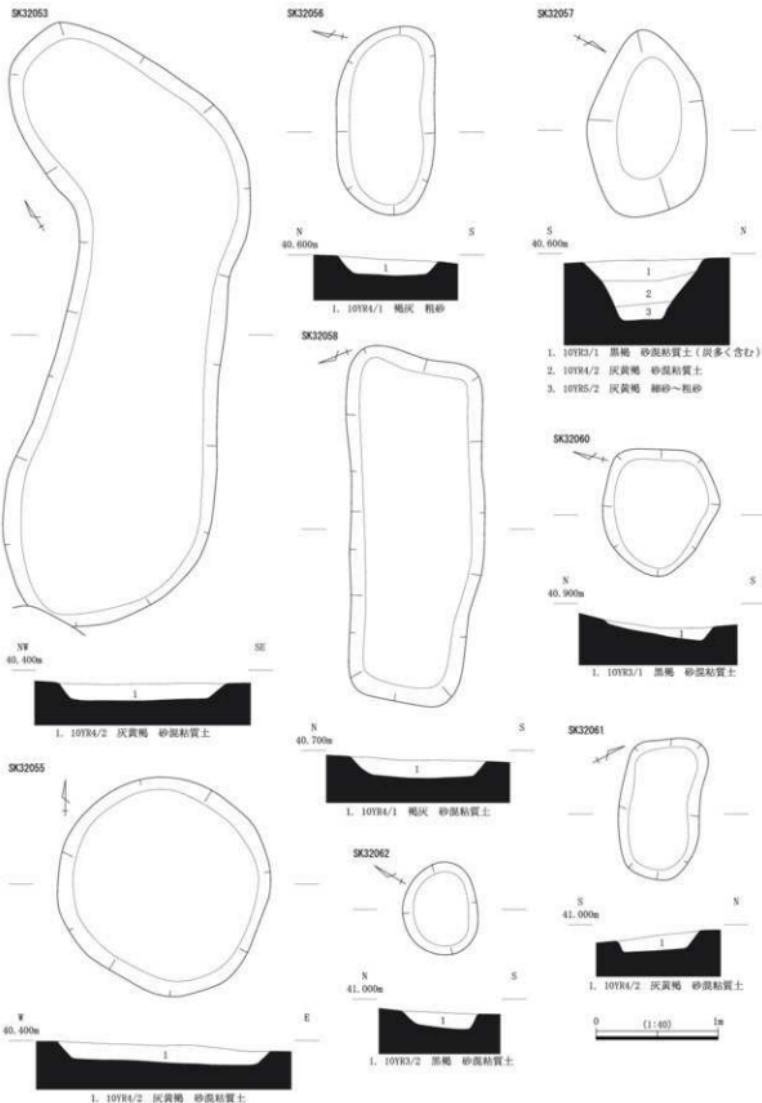


圖23 第二道構面檢出遺構 実測図13 (1/40)

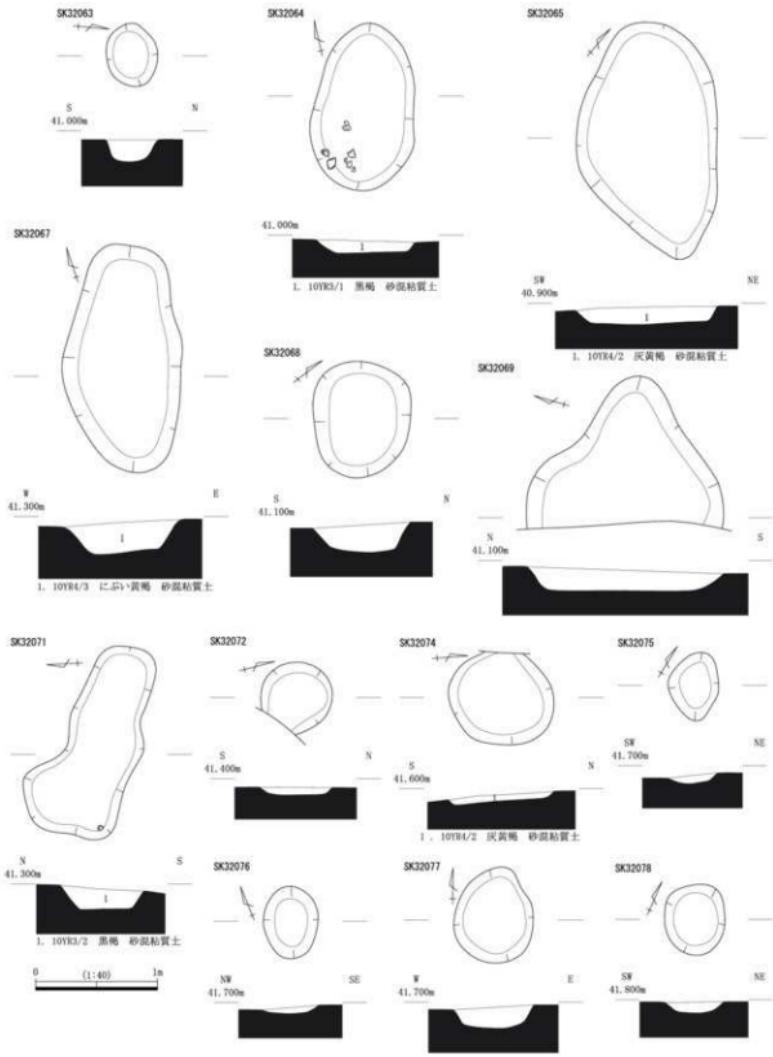


図24 第二道構面検出造構 実測図14 (1/40)

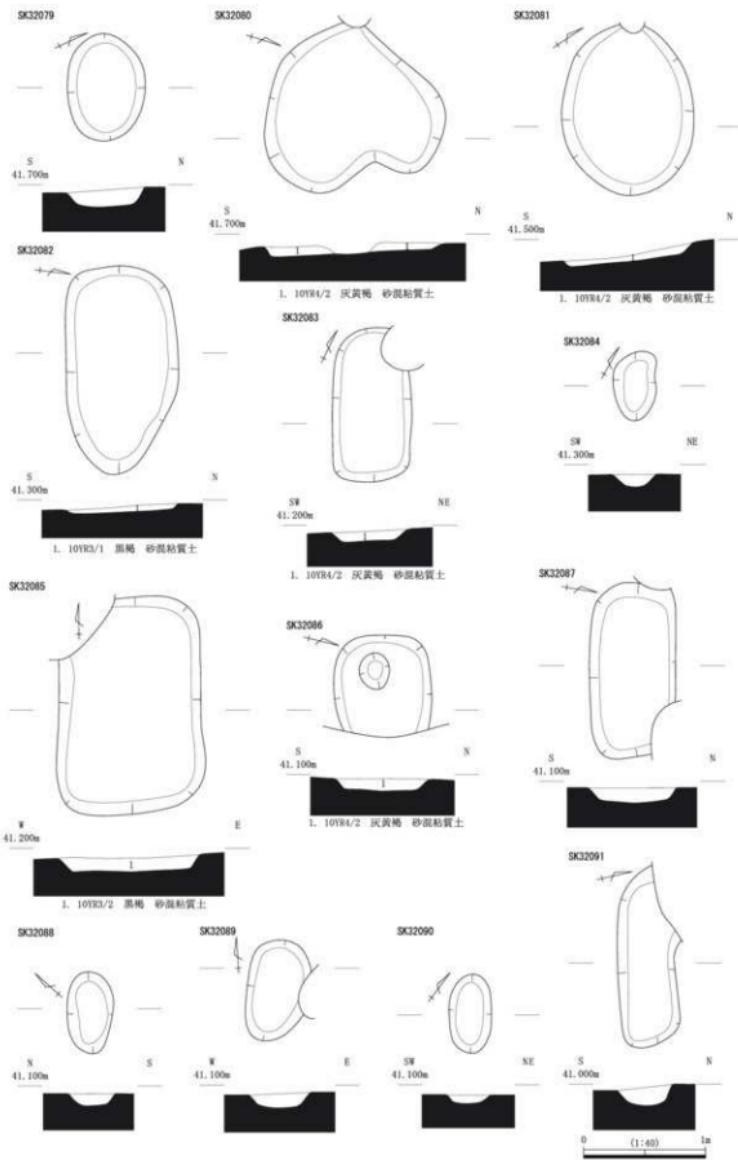


図25 第二遺構面検出遺構 実測図15 (1/40)

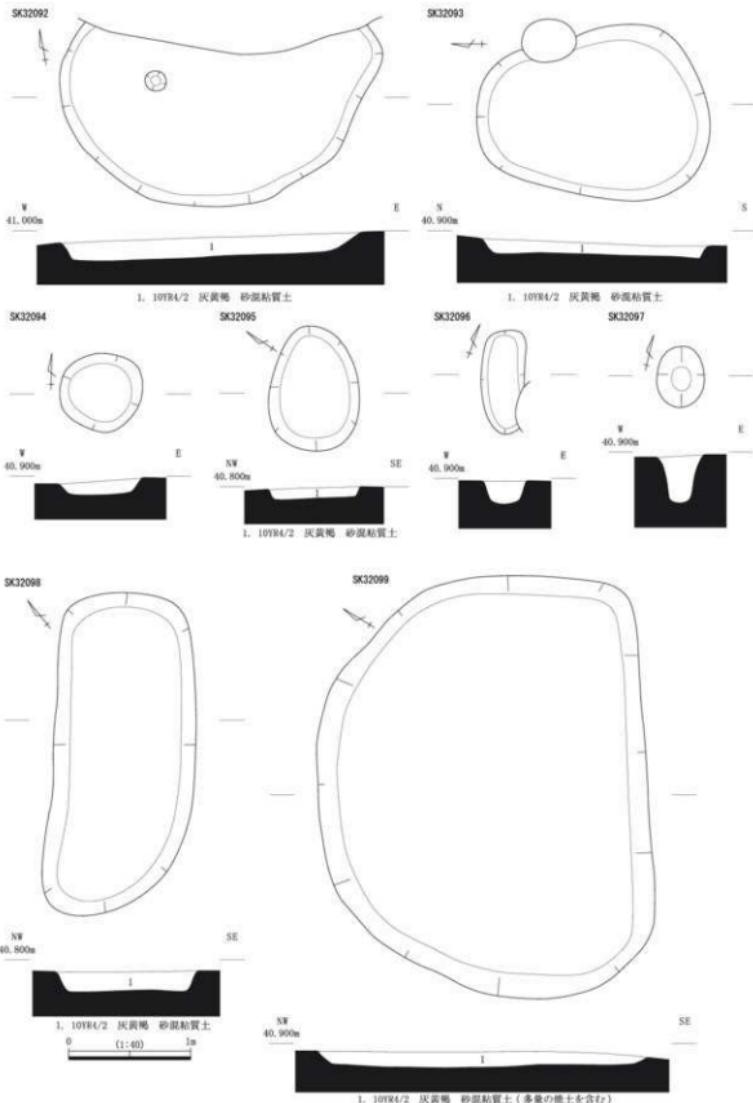


図26 第二遺構面検出遺構 実測図16 (1/40)

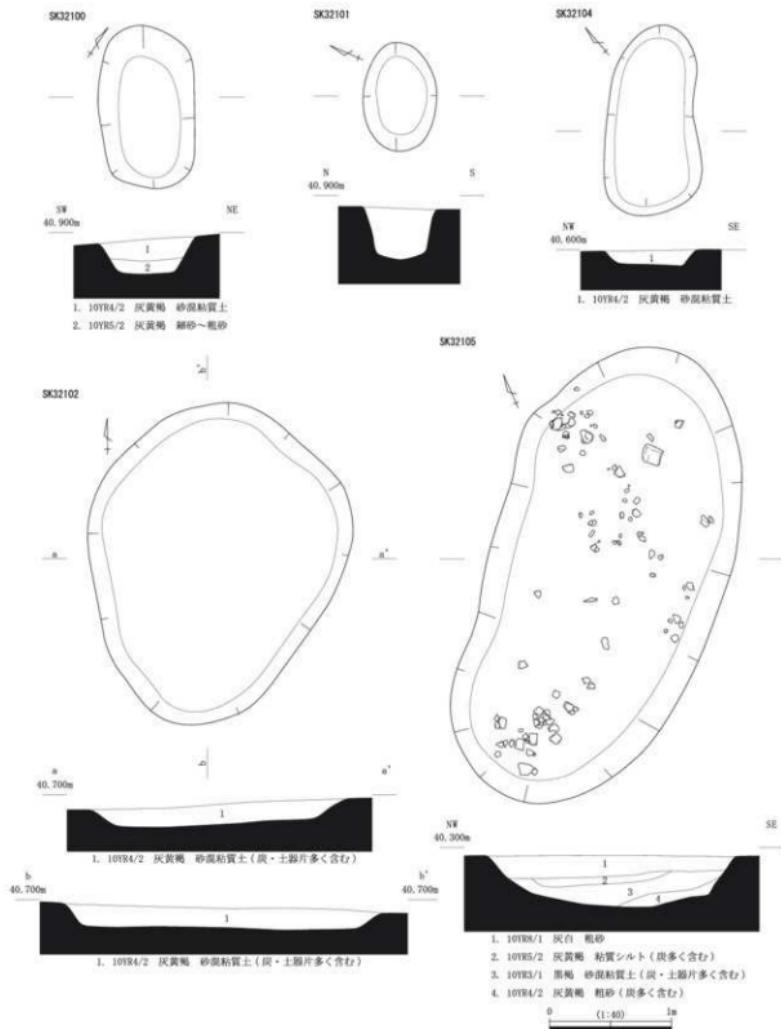


図27 第二遺構面検出遺構 実測図17 (1/40)

掘り形は溝状を呈し、短軸約1.3m～1.6m、長軸約4.8m、深さ約0.3mである。埋土は7層に細分でき、埋土のなかほどに粗砂が堆積することが観察できた。遺物は、弥生土器の壺や壺などが出土した。

SK32114（図29） 調査区南西側に位置し、SH32005に隣接して掘削された土坑である。SK32114の掘り形は楕円形で、短軸約0.8m、長軸約1.07m、深さ約0.17mである。埋土は2層に細分でき、いずれも粘性のある土質であった。

SK32119（図29） 調査区南西側に位置し、SK32139によって南側の一部を破壊される土坑である。SK32119の周囲には、たとえばSK32047など同様の形状の遺構がいくつか分布する点が特徴である。SK32119の掘り形は長方形で、短軸約1.78m、長軸約3.45m以上、深さ約0.2mである。埋土は2層に細分でき、いずれも粘性のある土層が堆積する。

SK32122（図29） 調査区南西側に位置し、SK32123によって破壊される土坑である。SK32122の掘り形は一部を破壊されるが長方形で、短軸約1.05m、長軸約2.53m、深さ約0.2m、断面形状は逆台形を呈する。埋土は2層に細分でき、下層は地山ブロックを含む褐色粘質土が堆積する。

SK32126（図30） 調査区南西側に位置し、SK32124・32125によって破壊される土坑である。SK32126の掘り形は一部が不整形ではあるが長方形を呈し、短軸約1.91m、長軸約2.3m、深さ約0.12mである。遺構の底部は東に向けて著しく低くなり、西端と東端の高低差は約0.3mある。SK32126の埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。遺物は土坑の南半で、なおかつ底部直上付近からその多くが出土した。出土したのは、土師器壺や須恵器杯・蓋などである。

SK32139（図31） 調査区南西側に位置し、SK32140に南西側の一部を破壊された土坑である。SK32139の掘り形は長方形で、短軸約1.98m、長軸約2.15m、深さ約0.19mである。埋土は2層に細分でき、いずれも粘性のある土層である。

SK32151（図31） 調査区南西側に位置し、溝状を呈する土坑である。SK32151は、短軸約0.72m、長軸約3.64m、深さ約0.15mである。埋土は2層に細分でき、上層には炭化物が含まれる。

SK32156（図32） 調査区中央南側に位置する土坑である。SK32156の掘り形は南西側がやや突出する不整形な形状で、短軸約1.53m、長軸約2.25m、深さ約0.55mである。SK32156の断面形状は楕形を呈し、埋土は7層に細分できる。また、断面の状況と各土層の層相より、埋没したのちに再度掘削された土坑の可能性がある。また、埋土のなかほどに粒径の大きい堆積物が認められた。遺物は、弥生土器の壺や鉢などが出土した。

SK32159（図32） 調査区中央南側に位置し、SK32231に隣接して掘削された土坑である。SK32159の掘り形は円形で、直径約0.8m、深さ約0.23m、断面形状は逆台形を呈する。SK32159の埋土は2層に細分できる。

SK32161（図32） 調査区中央南側に位置する土坑で、SK32160を破壊して形成された土坑である。SK32161の掘り形は円形で、直径約0.95m、深さ約0.18m、断面形状は逆台形を呈する。SK32161の埋土は3層に細分でき、埋土の下半は粒径の小さい堆積物が認められる。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32162（図32） 調査区中央南側に位置し、SK32161の北側約3mの地点に掘削された土坑である。SK32162の掘り形は楕円形で、短軸約0.6m、長軸約0.75m、深さ約0.28mである。SK32162の断面形状は逆台形を呈する。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32172（図34） 調査区中央東側に位置し、SK32173を破壊して形成された土坑である。SK32172の掘り形は溝状を呈し、短軸約0.64m、長軸約1.55m、深さ約0.3mである。断面形状はやや丸みのある逆台形である。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32178（図34） 調査区中央東側に位置し、SK32179などを破壊して形成された土坑である。SK32178は南西～北東方向に主軸をとり、掘り形は長方形を呈する。SK32178は短軸約1.3m、長軸約3.1m、深さ約0.08mである。SK32178は灰黃褐色砂混粘質土の単層で、断面形状は浅い皿状を呈する。遺物は、弥生土器の壺などが出土した。

SK32183（図35） 調査区東側に位置し、東西方向に主軸をとる土坑である。SK32183の掘り形は溝状を呈し、短軸約1.15m、長軸約2.62m、深さ約0.2mである。SK32183の断面形状は楕形を呈し、埋土

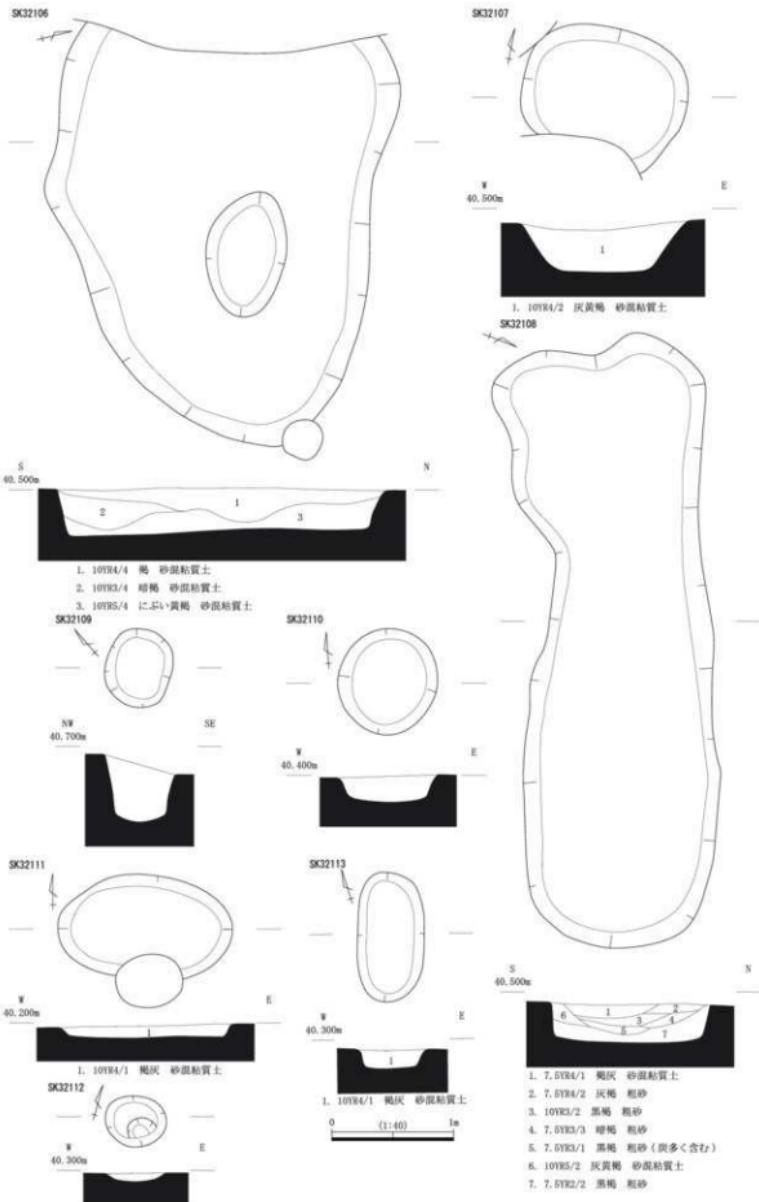


图28 第二造橋面検出遺構 実測図18 (1/40)

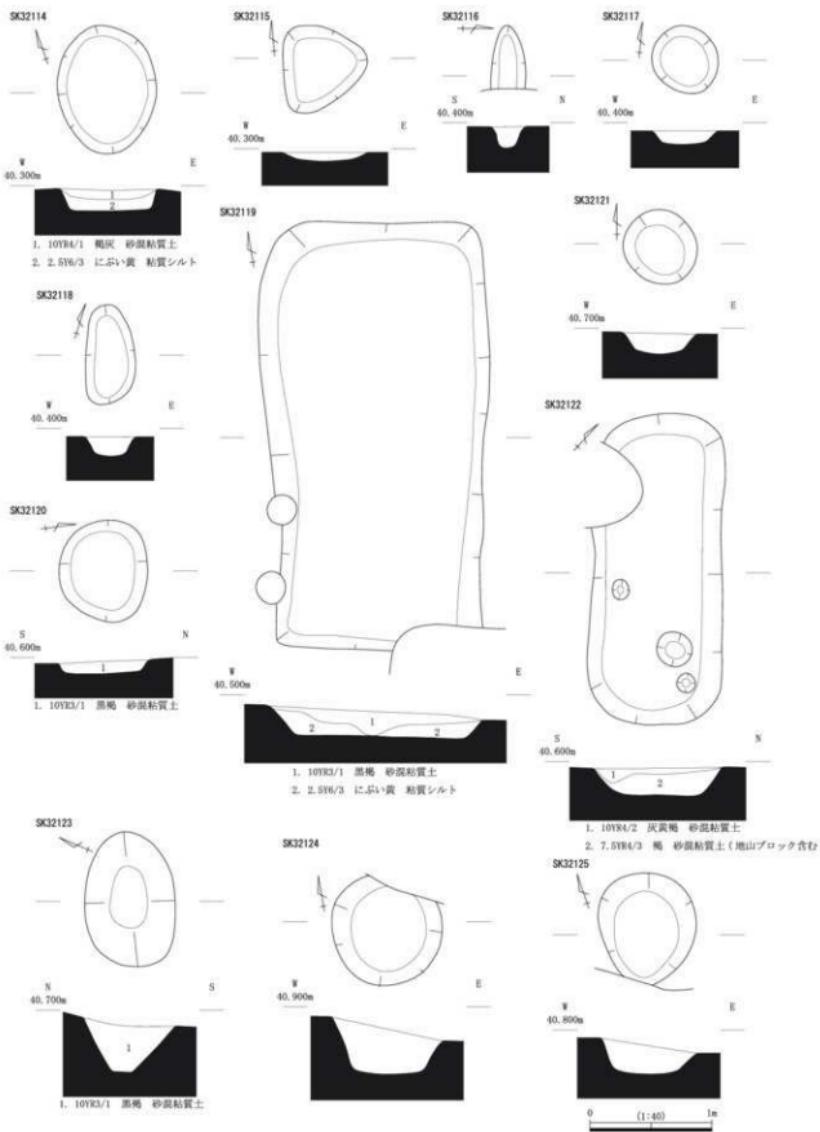


図29 第二道構面検出遺構 実測図19 (1/40)

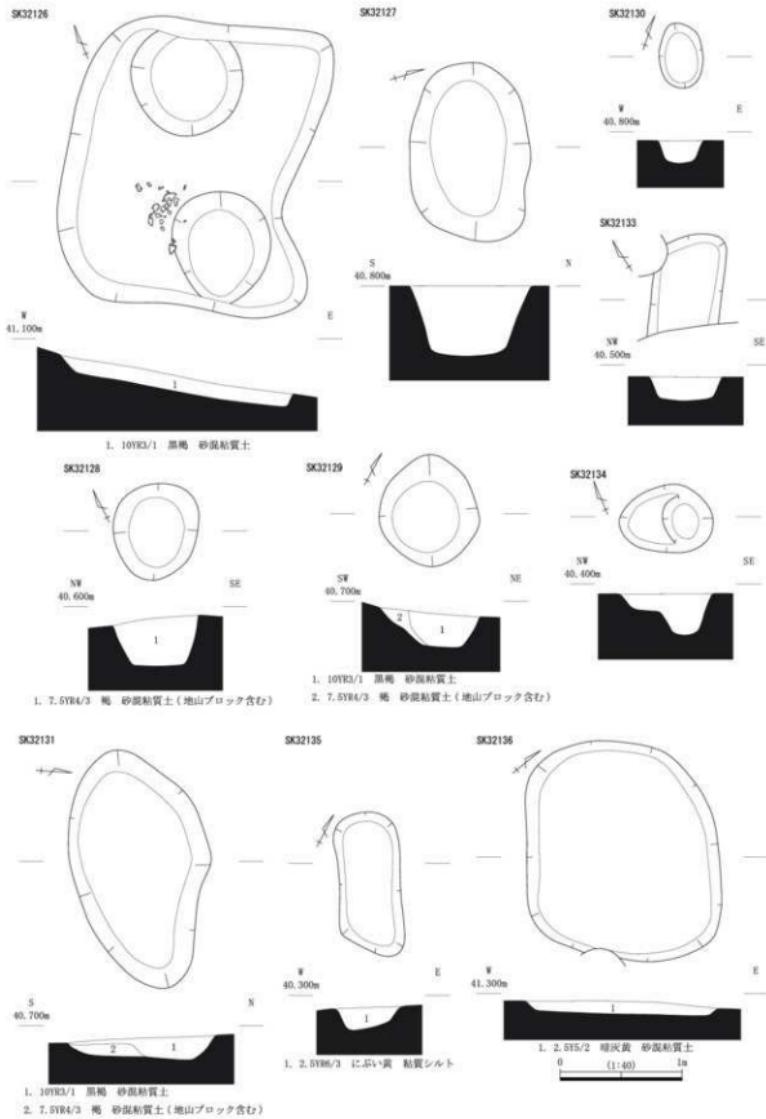


図30 第二道構面検出構造 実測図20 (1/40)

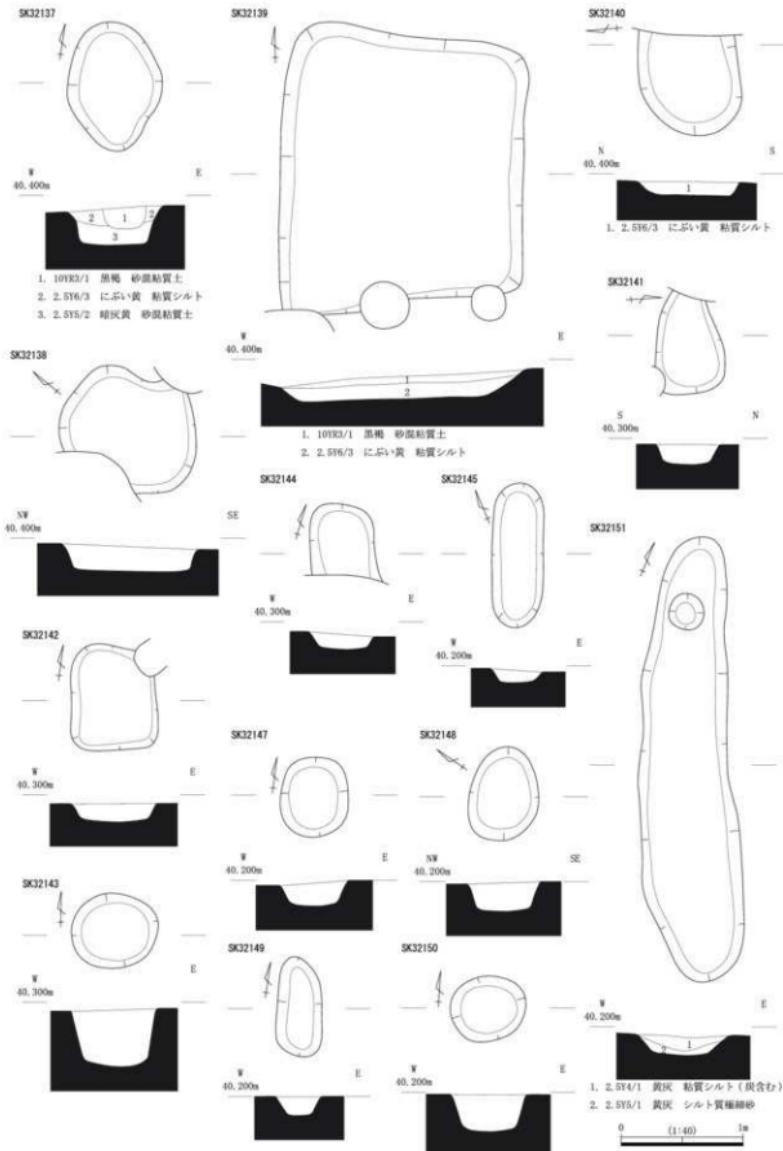


図31 第二造構面検出造構 実測図21 (1/40)

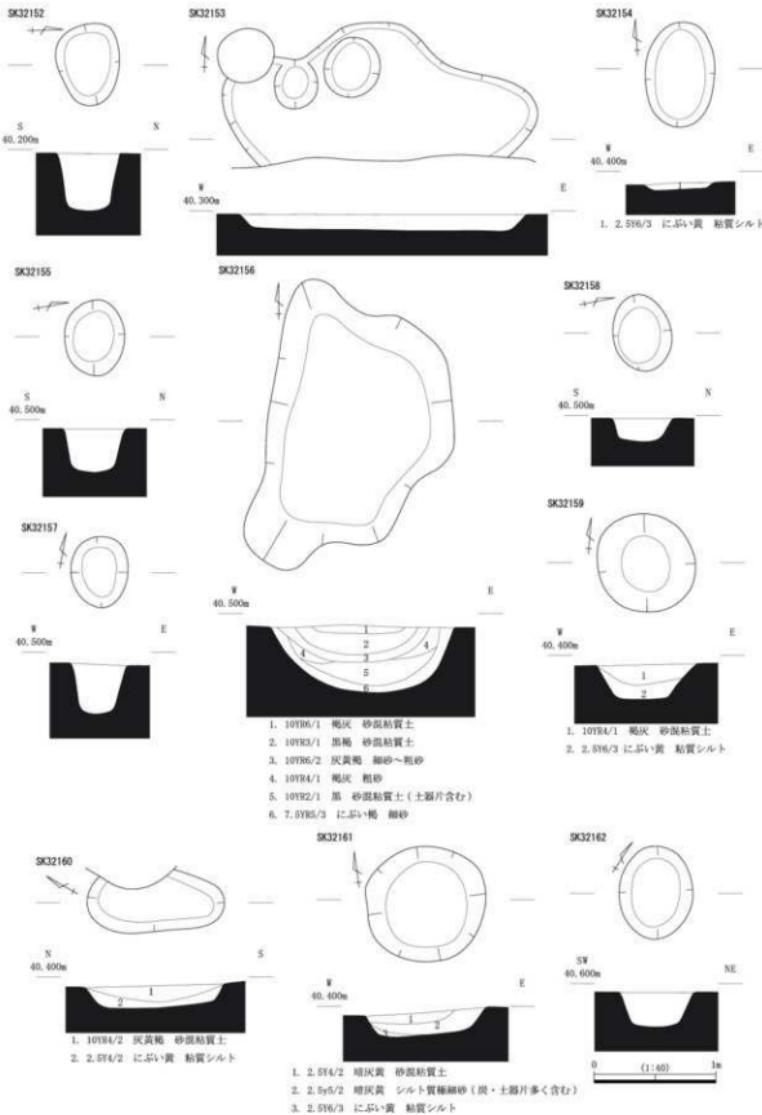


図32 第二遺構面検出遺構 実測図22 (1/40)

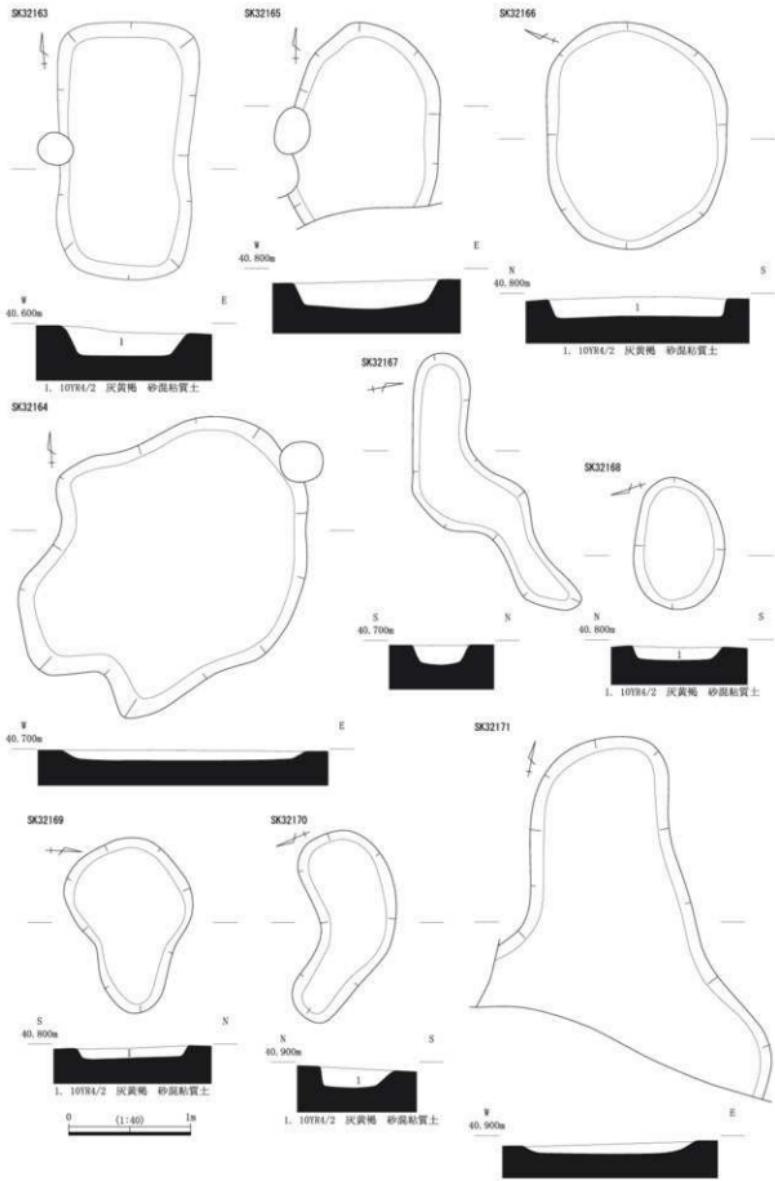


図33 第二造橋面検出遺構 実測図23 (1/40)

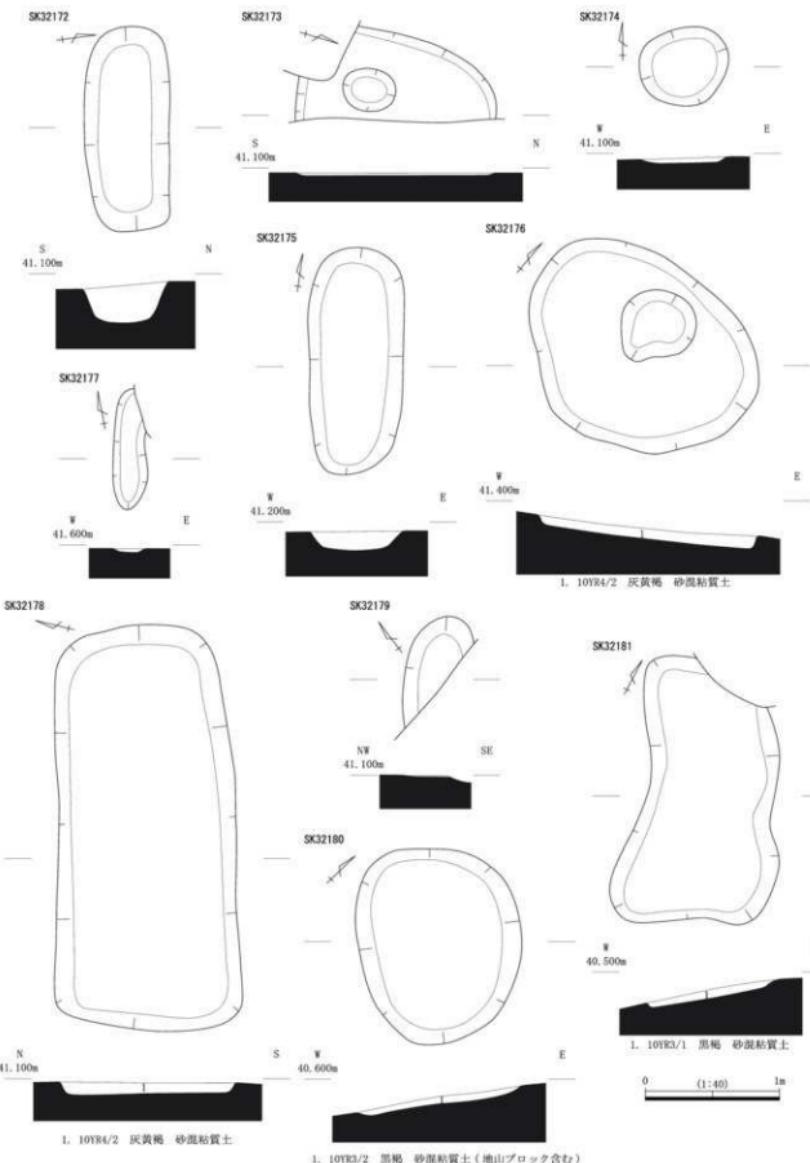


図34 第二造橋面検出遺構 実測図24 (1/40)

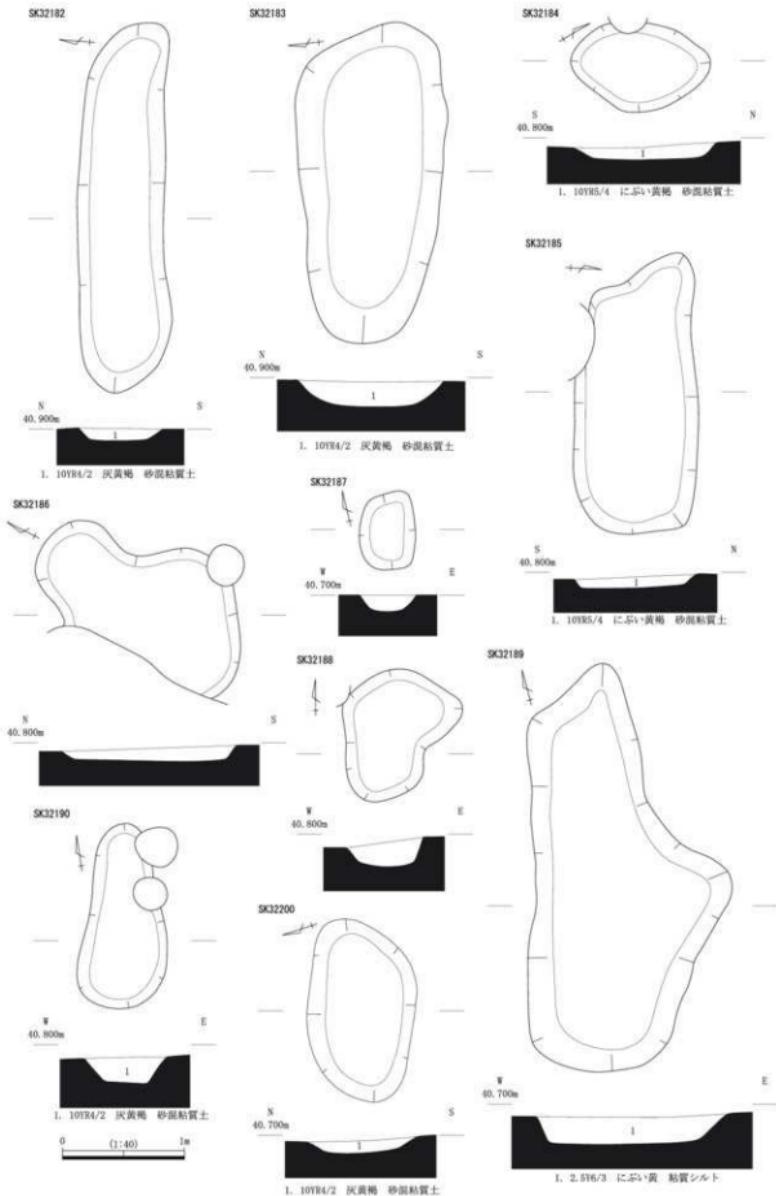


図35 第二造橋面検出遺構 実測図25 (1/40)

は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。

SK32200 (図35) 調査区南東側に位置する土坑である。SK32200の掘り形は楕円形を呈し、短軸約0.89m、長軸約1.5m、深さ約0.1mである。SK32200の断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。

SK32204 (図36) 調査区南東側に位置し、SD32002に遺構の南側の一部を破壊される。SK32204の掘り形は、遺存する箇所の観察から長方形に近く、南北長約1.08m以上、東西長約1.85m、深さ約0.28mである。SK32204の断面形状は逆台形を呈し、埋土は4層に細分できる。埋土の特徴は、下半に細砂～粗砂が堆積することである。遺物は、弥生土器の甕のほか、須恵器も出土した。

SK32206 (図36) 調査区南東側に位置する土坑で、SD32001に北東側の一部を破壊された土坑である。SK32206の掘り形は楕円形で、南北長約0.75m、東西長約0.8m、深さ約0.12mである。SK32206の断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の甕などが出土した。

SK32207 (図36) 調査区南東側に位置し、SK32208を破壊して形成された土坑である。SK32207の掘り形は楕円形で、短軸約0.75m、長軸約0.92m、深さ約0.09mである。SK32207の断面形状は逆台形を呈し、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の甕などが出土地。

SK32218 (図37) 調査区中央東側に位置し、搅乱によって遺構の東側の一部分を破壊された土坑である。また、SK32218は、SK32233が埋没したのちに形成されたことが分かる。SK32218の掘り形は不整形で、南北長約3.0m、東西長1.85m以上、深さは最深部で約0.25mである。SK32218の底部は北側に向けて深くなる傾向が認められた。埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢などが出土した。

SK32227 (図37) 調査区北西側に位置し、SK32038に隣接して掘削された土坑である。SK32227の掘り形は楕円形で、短軸約0.5m、長軸約0.62m、深さ約0.14mである。SK32227の断面形状は椀形を呈する。遺物は、弥生土器の蓋などが出土した。

SK32229 (図37) 調査区北西側に位置し、SK32064に東側の一部を破壊された土坑である。SK32229の掘り形は東西方向に長い楕円形で、南北長約0.64m、東西長1.3m以上、深さ約0.17mである。SK32229の断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粗砂の単層である。遺物は、弥生土器の底部などが出土した。

SK32231 (図37) 調査区中央南側に位置し、SD32002に遺構の南半を破壊された土坑である。SK32231は東西方向に主軸をとり、検出面からの深さは約0.16mである。SK32231の性格は、SD32002に多くを破壊されるため不明な点が多いが、SD32002よりも南側でSK32231の続きを検出することができなかつたため、遺構の規模から土坑と判断した。遺物は、弥生土器の甕などが出土した。

SK32233 調査区中央やや北東側に位置する土坑である。SX32217とSK32218およびSD32006に遺構の大半を破壊されたため、遺構の形状などは不明である。遺物は、弥生土器の甕や壺などが出土した。

e. 溝

III区では20条前後の溝を検出したが、掘り形が不整形なものが多く、なおかつ他の溝との関連性を想定しにくいものが多数を占める。ここでは特徴的な溝のみ記述する。

SD32001 (図38) 調査区中央付近で北西～南東方向に掘削された溝である。SD32001は多数の遺構に破壊されるため、遺構の一部の情報を失う。また、SD32001の東・西端は極端に南側へ屈曲して途切れる。SD32001の検出長は90m程度で、深さは約0.2mである。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。他の遺構との関係は、前述したSX32146と接点を持つ位置関係にあり、かつSX32146が合流点から北側に連続しないことから、双方は関連する遺構の可能性があると考えられる。

SD32001の機能については、埋土の観察から流水があったとは考えにくいため水路などの用途で掘削された溝の可能性は低い。SD32001の北側と南側で他の遺構の分布密度が異なる点を評価すると、SD32001は集落内の区画を意図して掘削された溝の可能性が考えられる。遺物は、弥生土器の甕・壺・底部や石器などが出土した。

SD32002 (図38、図版9) 調査区南端に東西方向に掘削された溝である。SD32002の1～2m程度南側には、同一方向に掘削されたSD32004が位置する。SD32002の東端は調査区内で取り、西側は調査区の外側

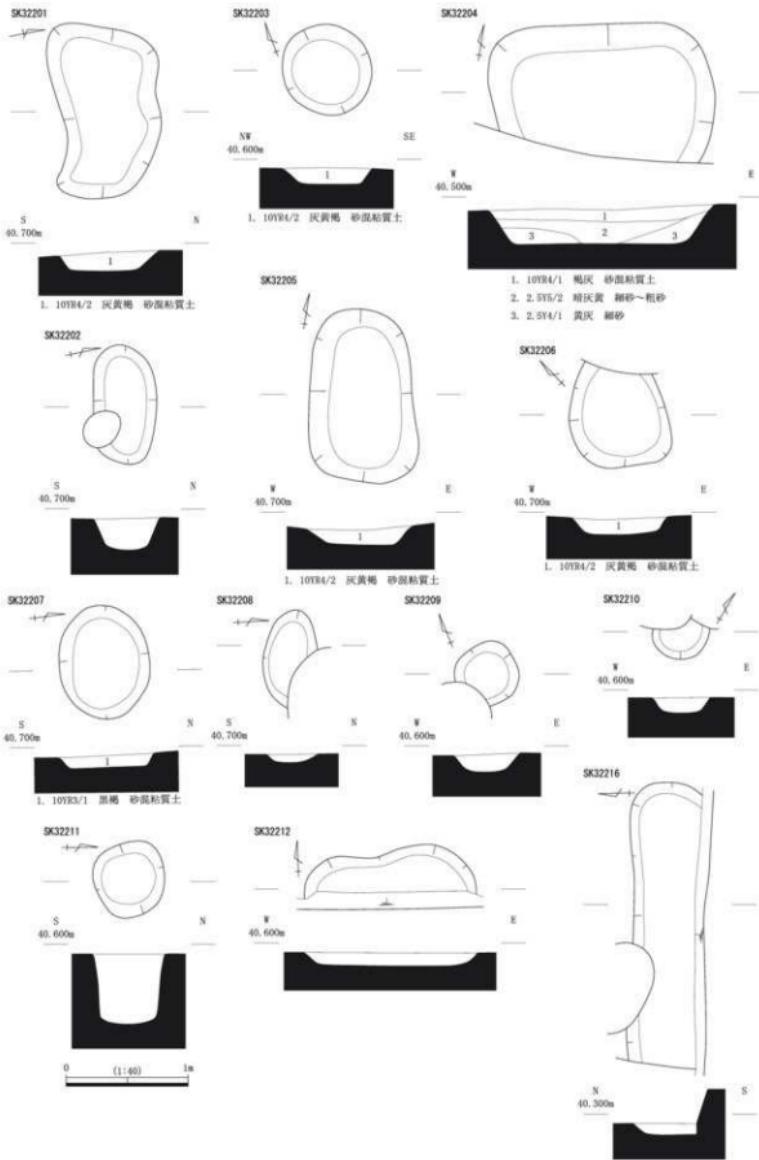


図36 第二遺構面検出遺構 実測図26 (1/40)

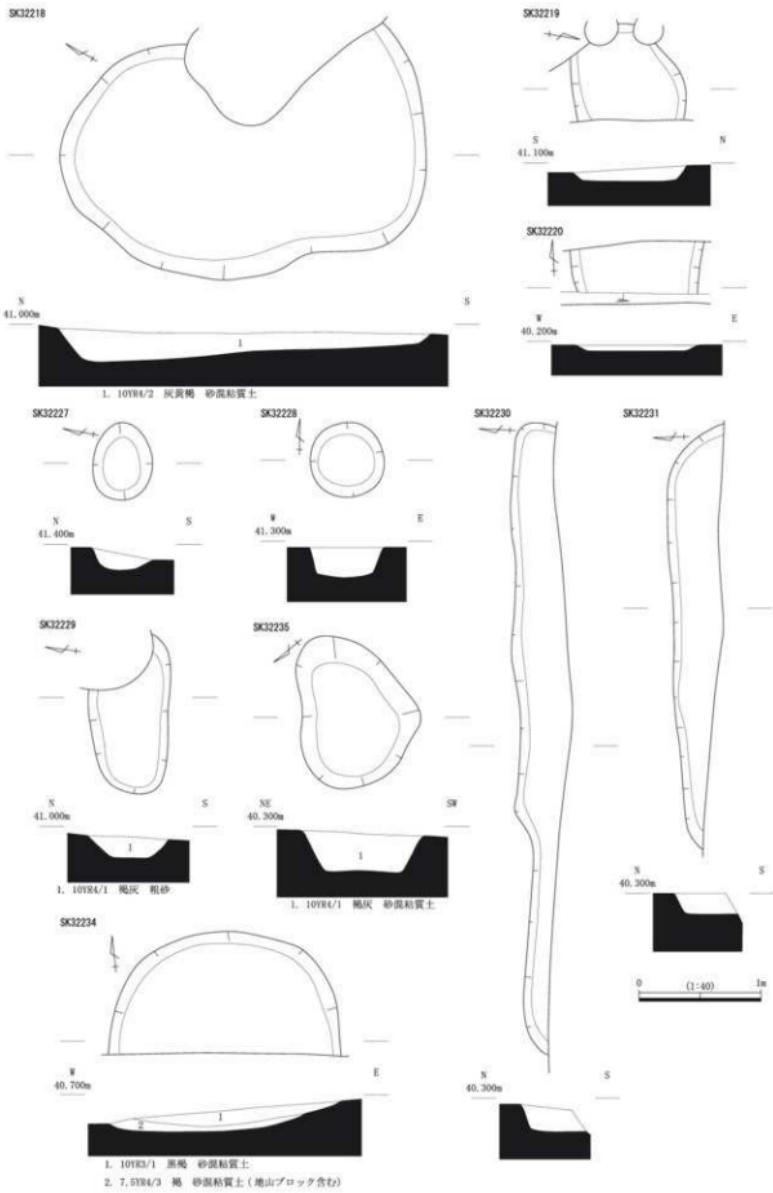


図37 第二造橋面検出遺構 実測図27 (1/40)

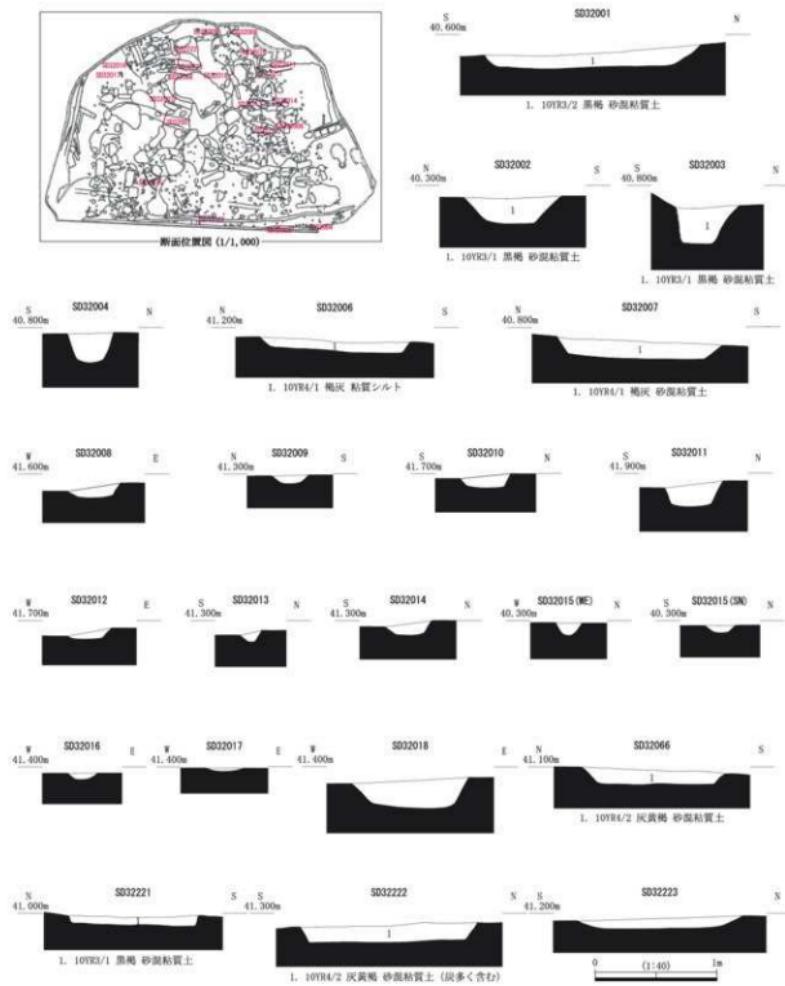


図38 第二道構面検出構造 実測図28 (1/40)

へと続く。SD32002の検出長は40m以上、幅は最大値で約0.75m、深さは0.2mで、埋土は黒褐色粘質土の単層である。なお、南西側の奥の坊権現前遺跡のV区で検出したSD53001、奥の坊遺跡のV区で検出したSD52003は、当地区のSD32002の西側延長線上に位置することから、同一の溝の可能性が高いと考えられる。

SD32002の機能については埋土の観察から流水があったとは想定できず、区画を意图して掘削された溝の可能性が高い。遺物は、鉄製品などが出土したが、時期を特定できる土器などは出土していない。ただし、前述した奥の坊権現前遺跡のV区のSD53001、奥の坊遺跡のV区のSD52003は、いずれも古代に帰属する遺物が出土しており、当地区的溝も当該期の溝の可能性が高いと考えられる。

SD32003・32004（図38） 調査区の南側に位置し、双方は重複関係を有して東西方向に掘削された溝である。平面での観察から、SD32004がSD32003に先行して掘削されたことが分かる。また、SD32004は西側でSK32212にも破壊される。SD32003は幅0.5m以上、深さ約0.3m、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。SD32004は計測できる箇所で幅約0.3m、深さ約0.24m、断面形状は逆台形を呈する。双方の溝は重複関係より前後差が認められるが、SD32001と隣接しつつ同一の方向に掘削されることから、SD32002と同様に区画を目的として掘削された溝の可能性が考えられる。遺物は、SD32004から石器が出土した。

SD32006（図38） 調査区東半に位置する南北方向の溝である。溝のなかほどで不整形に掘り形が乱れており、SX32217など後世に掘削された遺構に一部を破壊される。SD32006の北側はSH32001に破壊され、そこから北側には続かず、南側についてもSK32178以南に溝は連続して掘削されていない。溝の検出長は約26m、深さは約0.1m、埋土は褐灰色粘質シルトである。なお、溝のなかほどで掘り形が乱れる点について、現地調査で遺構の重複関係などは確認できず、単純に掘り形が幅広になったものと解釈した。遺物は、弥生土器の甕や底部などが出土した。

SD32015（図38） 調査区中央やや南西側に位置する溝で、SX32146とSK32113に一部を破壊される。SD32015は、東西方向と南北方向の双方の溝が合流する平面形を呈するが、調査時の観察で別々の溝とは異なり同時に機能したものと判断し、1条の溝として報告する。

SD32015は、幅0.2～0.3m、深さ約0.1mである。溝の断面形状は逆台形を呈する。SD32015の機能は、SH32005に隣接して掘削され、なおかつ重複関係を有さないことから、SH32005と関連する溝の可能性が考えられる。

SD32221（図38） 調査区東側中央付近に位置し、SD32006に隣接して掘削された溝である。SD32221はSK32092の北半の一部を破壊して掘削される。検出長は約6.2m、幅は約1.05m、深さは約0.08m、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。

SD32066・32222・32223（図38） 調査区中央やや北西側に掘削された3条の溝で、東西方向を指向する。SD32222とSD32223は重複関係を有し、後者が先行して掘削される。SD32222は東側で南へと屈曲する溝で、溝の西側の一部をSK32020によって破壊される。SD32222の検出長は約12m、幅は約1.45m、深さは約0.14mである。埋土は灰黄褐色砂混粘質土で、炭化物を多量に含む点が特徴である。

SD32223は、溝の西側でSK32021～32023・32025などの遺構に破壊され、同様に東端もSD32222によって破壊される。SD32223の検出長は約8.7m、幅は約1.35m、深さは約0.09mである。SD32223の東半を中心に、土器片などの遺物が出土した。

SD32066はSD32223の南側1mの位置に掘削された東西方向の溝で、東端をSX32214、西側をSK32024・32025によって破壊される。SD32066の検出長は約9m、幅は約1.2m、深さは約0.14m、埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。

第6章 総括

第1節 Ⅲ区の調査成果

Ⅲ区の遺構検出面は2面でおもに3時期の遺構・遺物を検出した。第一遺構面では近世以降の遺構、第二遺構面では弥生時代中期前半～古代の遺構を確認した。このうち、当地区の土地利用が最も盛んになるのが、遺構数・遺物量からも弥生時代中期前半であることは明白である。

弥生時代中期前半の遺構・遺物に注目すると、検出した遺構は、堅穴建物跡・ピット・土坑・溝で、そのほかに性格を特定できない規模の大きい掘り形の遺構が多数認められた。出土遺物の詳細は本書で報告していないが、これらの遺構に伴う遺物の帰属時期と遺構の分布状況から、北側に隣接するⅥ区からの一連の遺構と判断することができる。そのように考えると、Ⅲ区の遺構密度の高さと出土遺物の多さから、Ⅲ区はⅥ区と同様に当集落の中心的な居住空間と判断できる。Ⅲ区の南側で隣接して調査したI・II区でも弥生時代中期前半の遺構を検出しているが、こちらは遺構密度がそれほど高くないことから、Ⅲ・VI区が集落の中心的な居住空間、I・II区が集落の南側縁辺部と位置づけられる。なお、Ⅲ区の南側に位置するSK32126からは、古代に帰属するものと考えられる遺物が出土しており、南側のII区でわずかながら認められた古代の遺構と関連する遺構と捉えることができる。よって、Ⅲ区の南側以南ではこの時期の遺構が点在する状況を推定することができる。

遺物については次年度の報告書に掲載する予定だが、整理途上の所見を述べておくと、特徴的な遺物としてSX32214から鋳造鉄斧が1点出土した点を挙げることができる。また、Ⅲ層（遺物包含層）からは擬朝鮮系無文土器の破片が数点出土しており特筆される。擬朝鮮系無文土器は、VI区の遺物包含層からも出土しており、当集落で一定数保有していたことが予想される。当集落の調査で、遺構に伴い擬朝鮮系無文土器が出土した事例はわずかだが、朝鮮半島との関連を考える場合に重要な遺物と言える。

以上のように、Ⅲ区では非常に多くの遺構が調査区全域に分布することが明らかとなり、加えてこれらの遺構の大半が、北側から連続して分布する弥生時代中期前半の同一集落の遺構群であることが推定できた。次年度報告する予定の遺物もあわせて検討すれば、より詳細な当該期の集落の様子を明らかにすることができるだろう。

第2節 奥の坊遺跡の集落の範囲

第3章において当該事業で実施した発掘調査成果を整理したが、本書で示した奥の坊遺跡の弥生時代中期前半の集落の範囲と、集落の選地の要素となった可能性のある条件をここで整理しておく。

奥の坊遺跡は、南へと舌状に伸びる丘陵に挟まれた東西約60mの空間に集落の中心がある。集落の範囲を周辺の調査成果を考慮して検討すると、西端はⅢ区西端から約50m西側まで、南端も同様に約50m南側まで、北側は丘陵の裾付近までと考えることができる（図4参照）。このように捉えると、集落の形状は南西側が西へと張り出すものの、おおむね南北に細長い範囲と考えることができる。このように見た場合の集落規模は、東西方向の最大長は約120m、南北長が約175mである。集落の範囲を決める要素となるのは、地形的な制約が大きな要因と考えられる。特に集落の南端については、流路などが通過する低地部であることが要因のひとつと見ることができる。

以上のように集落の範囲を捉えると、地形に多くの制約を受けて限定されたなかで集落を形成しているように見られるが、他方で、地形と集落のあり方を詳細に見ていくと、集落を営むうえでの地形的な優位性を考慮して集落の場所を選定していることを奥の坊遺跡の事例から考えることができる。具体的には、Ⅲ区の東側にある丘陵は、集落の範囲を限定させる要因もあるが、一方で西側を流れる流路が増水した際に集落を護る役割を果たすと考えられる。また、集落の南側の低地部を流れる流路も集落と同時に機能していたとすれば集落の範囲を狭める要因となるが、他方で水の供給源になる可能もある。このように、地形の制約のなかで集落が成立していると考えられるが、そのなかでも地形的な優位性を考慮して集落の選地がなされていることが奥の坊遺跡の事例は示しているものと考えられる。これは、エリアBに位置するほぼ同時期の集落である大空北遺跡の状況を見ても首肯できる。大空北遺跡は増水時に集落を護るような地形的な優位性は認められず、集落の規模も奥の坊遺跡ほどは見積もれない。

また、遺構密度も高くない。双方を比較すると、やはり奥の坊遺跡の立地面での優位性がその差を生じさせていることは容易に推定できる。

以上見てきたように、奥の坊遺跡は、地形の特性を十分に把握したうえで、集落の形成を行なっていることが推定できた。今後は高松平野における同時期の集落と比較・検討していくことが必要と考えられる。

第3節 今後の検討課題

Ⅲ区から出土した遺物の詳細を本書で報告していない段階ではあるが、奥の坊遺跡の集落と周辺の遺跡についての検討課題を最後に述べて本書のまとめとする。課題の第1点は、弥生時代中期前半の一定規模の集落である奥の坊遺跡の集落の性格を検討することである。当集落から擬朝鮮系無文土器が出土した点や松菊里型住居が検出された点は特筆すべき事象であり、この点から朝鮮半島と関連性を持つ集落であることが予想される。これらの事象を踏まえて、正しく遺跡の性格を推定していく作業が求められる。

課題の第2点目は、奥の坊遺跡周辺の地形を復元し、あわせて集落の範囲を地形の状況を踏まえて検討していくことである。この点については、本書で周辺の遺跡の概要と地形面の概要を整理しており、これらを基礎資料として検討を進めたい。この課題に関連して、奥の坊遺跡の集落に伴う生産域の推定を行っていくことも必要である。居住域としての集落の実態は発掘調査によってある程度明らかになつたが、その基盤となつた水田経営については、調査では明らかにできなかつた。この点を補うには、一連の調査成果を参考とした地形復元が有効と考えられる。どの場所で水田耕作が営まれていた可能性があるのか、地形的な裏づけのある推定を行うことで、居住域と生産域、さらには墓域も含めた総体としての集落像を描くことができるだろう。

課題の第3点目は、周辺の遺跡を含めた事業地内の土地利用の変遷を整理することである。当事業のように、広範囲に渡って平面的な発掘調査を実施する事例というのは今後も限定的と考えられる。そのなかでも、奥の坊遺跡という一定規模の弥生時代中期前半の集落を確認していることから、この集落を中心に考え、集落の成立前はどのような状況だったのか、また集落が廃絶したのちはどのような土地利用になつたのか、周辺の遺跡の状況を踏まえて検討していくことが必要である。このためにも、各調査成果の検討をさらに進めていきたい。

以上を検討課題として、継続して遺物の整理を実施していくものである。

写 真 図 版

写真図版目次

図版 1

- 1 調査区近景（東から：左がⅡ区、右がⅢ区）
- 2 調査区近景（西から：左がⅢ区、右がⅡ区）

図版 2

- 1 調査区全景（上が北：北側がⅢ区、南側がⅡ区）

図版 3

- 1 第二遺構面 全景（西から）
- 2 第二遺構面 全景（南東から）
- 3 第二遺構面 全景（北西から）

図版 4

- 1 SH32001・32002 全景（南東から）
- 2 SH32001・32002 全景（北西から）
- 3 SH32001 全景（東から）

図版 5

- 1 SH32002 全景（東から）
- 2 SH32002 遺物出土状況（南から）
- 3 SH32003 全景（南東から）

図版 6

- 1 SH32004・32005 全景（北西から）
- 2 SH32005 遺物出土状況（南東から）
- 3 SH32005内 SK-1 遺物出土状況（北東から）

図版 7

- 1 SX32073 遺物出土状況（南東から）
- 2 SX32073 遺物出土状況（南東から）
- 3 SX32103 全景（南東から）

図版 8

- 1 SX32146 遺物出土状況（南東から）
- 2 SX32146 遺物出土状況（南東から）
- 3 SX32146 全景（西から）

図版 9

- 1 SK32105 遺物出土状況（南西から）
- 2 SK32132 全景（西から）
- 3 SD32002 全景（東から）



1 調査区近景（東から：左がⅡ区、右がⅢ区）



2 調査区近景（西から：左がⅢ区、右がⅡ区）



1 調査区全景（上が北：北側がⅢ区、南側がⅡ区）

1 第二遺構面 全景
(西から)



2 第二遺構面 全景
(南東から)

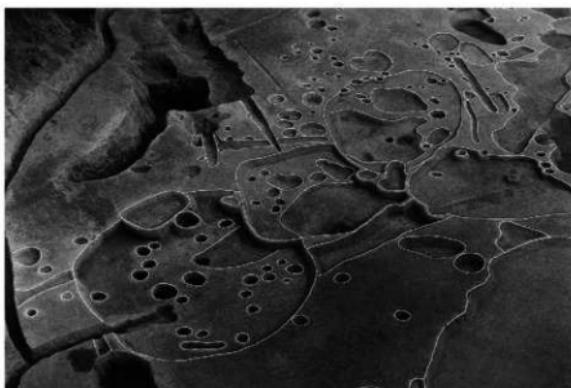


3 第二遺構面 全景
(北西から)





1 SH32001・32002 全景
(南東から)



2 SH32001・32002 全景
(北西から)



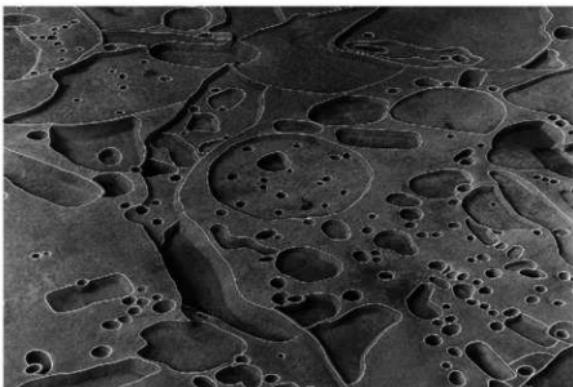
3 SH32001 全景
(東から)



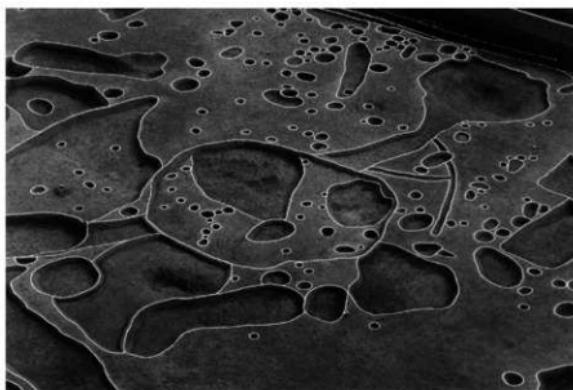
1 SH32002 全景
(東から)



2 SH32002 遺物出土状況
(南から)



3 SH32003 全景
(南東から)



1 SH32004・32005 全景
(北西から)



2 SH32005 遺物出土状況
(南東から)



3 SH32005 内 SK-I 遺物出土状況
(北東から)

1 SX32073 遺物出土状況
(南東から)



2 SX32073 遺物出土状況
(南東から)



3 SX32103 全景
(南東から)

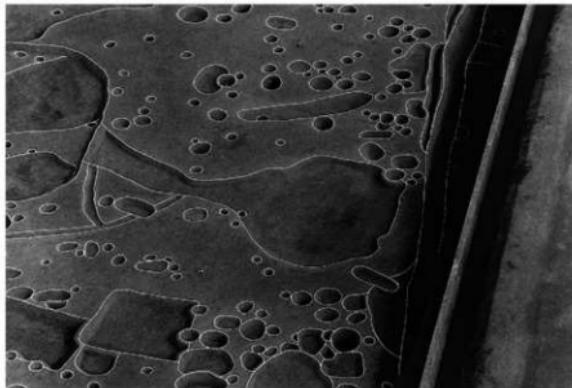




1 SX32146 遺物出土状況
(南東から)



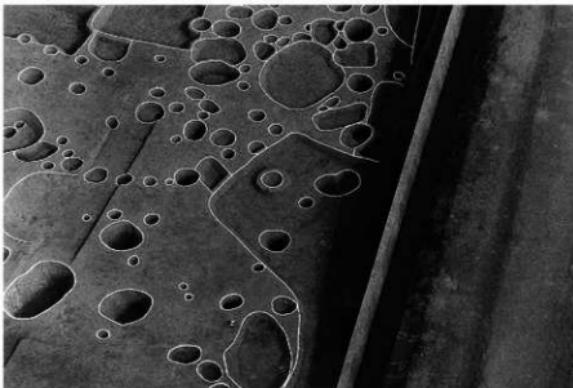
2 SX32146 遺物出土状況
(南東から)



3 SX32146 全景
(西から)



1 SK32105 遺物出土状況
(南西から)



2 SK32132 全景
(西から)



3 SD32002 全景
(東から)

報告書抄録

高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第11冊

奥の坊遺跡群 XI
(奥の坊遺跡 III区 遺構編)

平成25年3月29日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 高松市教育委員会
印 刷 株式会社 太陽社